新幹線文化財調査事務所調査報告書　第９集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅸ

今富城跡（いまとみじょうあと）

２０１７

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第９集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅸ

今富城跡（いまとみじょうあと）

（国土地理院電子国土 web より作成）

２０１７

長崎県教育委員会

巻頭写真　調査区遠景（南から大村湾を望む）

調査区は中央下のオレンジ線で囲われた場所

序　　文

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書として、平成28年度に実施した今富城跡の調査成果を収録したものです。

今富城跡は『大村郷村記』やルイス・フロイス『日本史』など著名な文献に記載が見える戦国期の大村氏の城館跡であり、JR大村線建設時の土取りや太平洋戦争中の海軍の高射砲陣地の建設により部分的な損壊を受けながらも、今日まで全面的な開発の手が加わることなく、戦国期城郭の曲輪の全体像を良く保って参りました。新幹線ルートは曲輪の主体部分を貫通することがないよう配慮されておりますが、やむをえず破壊される曲輪外郭西側部分について記録保存のための緊急埋蔵文化財調査を行うこととなりました。平成19年度には携帯電話通信塔の建設に伴い大村市教育委員会が曲輪北側の発掘調査を行い、城が使われていた時代の陶磁器などの遺物や空堀跡が出土いたしました。今回の調査でも同時代の明染付や青磁が、中世前期の瓦質土器･貿易陶磁や近世の肥前陶磁器と共に出土し、郡川下流地域における中世･近世の人々の活動のありようがより一層明らかとなりました。

県教育委員会は、これまでも各種開発事業において、協議・調整を重ね、文化財保護に尽力してまいりました。九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設事業につきましても、建設計画当初より可能な限り保存に努めていただくよう独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構および関係機関との協議を重ねた結果、建設工事に係る遺跡を記録保存する運びとなりました。

本書を刊行するにあたり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構、発掘調査に携わった方々をはじめ、多大なご尽力・ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

また、本書を文化財保護ならびに地域の歴史を学ぶ資料として活用していただければ幸いです。

平成29年10月

長崎県教育委員会教育長
池　松　　誠　二

例　　言

1　本書は長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が実施した九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る今富城跡の平成２８年度調査の発掘調査報告書である。平成２６年度に行った今富城跡周辺部の試掘・範囲確認調査ＩＭＡ 1409 の結果も収録した。

2　本調査区は大村市皆同町 485 番地５他に所在する。

3　調査に際して発掘調査業務の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。

4　遺跡の本調査の出土遺物の洗浄・分類・注記、台帳類の作成、報告書掲載遺物の実測は新幹線文化財調査事務所久原現場事務所において行った。

5　本調査での現場記録は濵村一成の指示の下、実測図作成を大坪芳典・新久保恒和が行った。現場での写真撮影は濵村・新久保が行った。

6　本報告書の執筆は、堀内和宏が行った。その際、担当者が作成した範囲確認調査および本調査の結果報告の記述を参照した。

7　遺物の実測は、堀内和宏及び内業作業員横田愛子・中山栄悟・中村吉成・古場光吉が行った。図面のトレースに際しては横田愛子の助力を得た。遺物の撮影は堀内および文化財調査員東郷一子が行った。

8　本報告書の編集は堀内が行った。

9　陶磁器類の同定については堀内に責がある。野上建紀（長崎大学多文化社会学部教授）、中野雄二（波佐見町教育委員会課長補佐兼文化財係長・学芸員）両氏の調査指導を頂き、川畑敏則（新幹線文化財調査事務所主任文化財保護主事）の助言を得た。

10　本書の作成にあたり、以下の文献を陶磁器等の編年の基礎資料として用い、本文中に挙げた近年の研究成果を参照した。

貿易陶磁：山本信夫 2000『大宰府条坊 XV』（太宰府市の文化財第 49 集）太宰府市教育委員会
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2

肥前陶磁：九州近世陶磁学会編 2000『肥前陶磁の編年』（九州近世陶磁学会 10 周年記念）

11　本調査の調査番号は IMA201606 である。

12　調査にかかる遺物および調査記録は全て新幹線文化財調査事務所久原現場事務所で保管している。

本 文 目 次

巻頭図版
Ⅰ　調査の経過
　1　調査に至る経緯
　　（1）九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要
　　①概要　1
　　②沿革　2
　　（2）新幹線建設に伴う遺跡分布調査及び範囲確認調査の経緯　4
　　（3）範囲確認調査の経過
　　①調査区の設定　6
　　②土層　6
　　③遺構・遺物　7
　　④結果　9
　2　調査組織　10
　3　発掘作業の経過　11
　4　整理作業の経過　12
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境　14
　2　歴史的環境　14
Ⅲ　過去の調査　18
Ⅳ　調査の概要
　1　基本層序　18
　2　調査の方法　20
　3　遺構・遺物　22
Ⅴ　まとめ　26

付編　今富城跡の近現代戦跡について　28

報告書抄録

挿図目次

第１図　九州新幹線西九州ルート概要図　1
第２図　試掘範囲確認調査対象地分布図　4
第３図　試掘坑配置図　6
第４図　範囲確認調査出土遺物実測図　7
第５図　TP1　平面・土層実測図　7
第６図　TP2　平面・土層実測図　8
第７図　TP3　平面・土層実測図　8
第８図　今富城縄張図　9
第９図　周辺遺跡分布図　13
第 10 図　空堀遺構断面図　18
第 11 図　土層断面図　19
第 12 図　地形測量図　20
第 13 図　調査区配置図　21
第 14 図　調査区平面図　22
第 15 図　出土遺物実測図　25
第 16 図　大村扇状地内軍事施設配置図　28
第 17 図　佐世保鎮守府陸上防衛部隊配置図　29

表目次

第１表　新幹線関係本調査履歴一覧　4
第２表　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う試掘範囲確認調査対象地一覧　5
第３表　範囲確認調査出土遺物観察表　7
第４表　遺物観察表　25

写真目次

巻頭写真　調査区遠景（南から大村湾を望む）
写真１　範囲確認調査出土遺物　7
写真２　TP １　完掘状況（西から）　7
写真３　TP ２　完掘状況（南から）　8
写真４　TP ２・１掘削作業風景　9
写真５　調査前伐採風景　11
写真６　調査区完掘状況（北西から）　22
写真７　出土土器・陶磁器　25
写真８　調査区遠景（北から）　27
写真９　四十口径三年式八糎高角砲　30
写真 10　九六式百十糎探照灯　30
写真 11　今富城跡高射砲陣地遺構　31

中表紙写真　国土地理院電子国土 web
URL：http://maps.gsi.go.jp/?ll=37.666429,135.373535&z=5&base=std&cd=f0%2Ff0_10&vs=c1j0l0u0&d=l#5/33.092646/130.402879/&base=std&ls=std%7C_ort&disp=11&lcd=_ort&vs=c1j0l0u0f0

Ⅰ　調査の経過

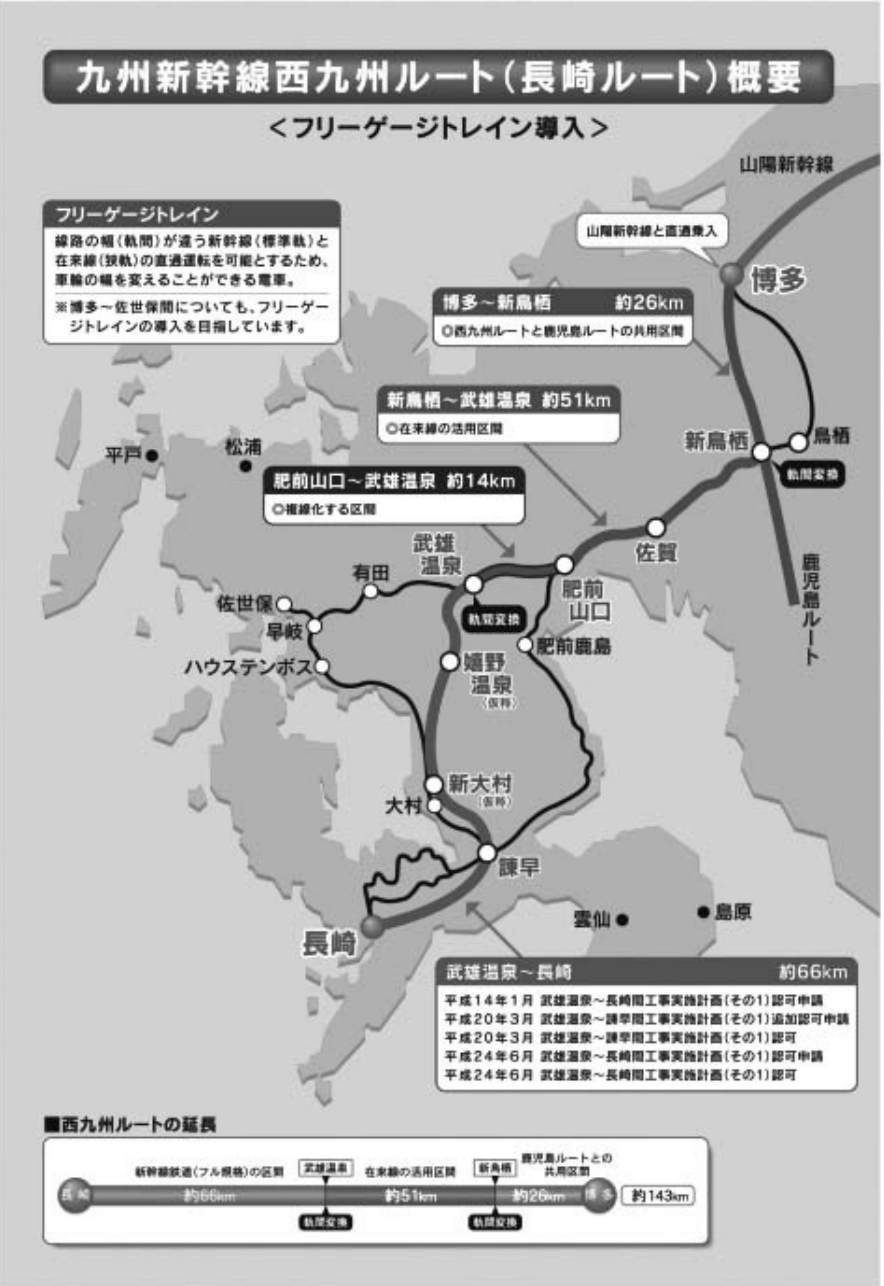
１　調査に至る経緯

（１）九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要

①　概要

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は、福岡市と鹿児島市ならびに長崎市を結ぶ整備新幹線計画（九州新幹線）のうち、福岡市と長崎市を結ぶルートを指す。整備新幹線としては佐賀県内を含めた区間が含まれるが、詳細なルート案は未定であり、未着工である。

現在の計画としては、博多駅 ～ 新鳥栖駅間（約26Km）は鹿児島ルートと路線を共有し、新鳥栖駅 ～ 武雄温泉駅間（約51Km）は在来線を活用する。武雄温泉駅 ～ 長崎間（約66Km）はフル規格の新線である。使用車両として、車輪の幅を走行中に変更できるフリーゲージトレインを導入する計画だったが、フリーゲージトレインの開発が遅れ、2022年度までの量産化が間に合わないことから、博多駅～武雄温泉駅間の在来線と武雄温泉駅～長崎駅間の新幹線を武雄温泉駅で乗り継ぐ「リレー方式」で2022年度内に暫定開業することとなった。現在の在来線特急「かもめ」と比べて、乗り継ぎ時間を含め、30 ～ 45分程度の時間短縮が図られる。



第１図　九州新幹線西九州ルート概要図（長崎県HPより）

既に開業した整備新幹線区間の場合と同じく、上下分離方式を取る。建設主体は鉄道建設・運輸施

設整備支援機構（鉄道・運輸機構）である。平成８年（1996）に決定した新スキームに従い、開業後も鉄道・運輸機構が駅・路線・車両基地などの設備を保有して、受益額の限度内で営業主体の九州旅客鉄道（ＪＲ九州）から貸付料の支払いを受ける制度である。不足する工事費用については３分の２を国が、３分の１を沿線自治体（県・市町村）が負担する。国負担分には既設新幹線（東海道・山陽・東北・上越）の設備を旧新幹線保有機構から JR 各社へ譲渡した支払い額が含まれ、沿線自治体の起債には地方交付税交付金による補助が行われる。

車両基地は長崎県大村市の竹松町・沖田町付近に建設され、県内駅は長崎、諫早、新大村（仮称）である。車両基地予定地は竹松遺跡と重なり、ほとんどの範囲が埋蔵文化財調査対象となった。平成 23 年度は長崎県埋蔵文化財センターが発掘調査主体となり、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が平成 24 年度（2012）から 28 年度（2016）にかけては約 10 万㎡（路線部分を含む）の調査を行い、平成 28 年度から発掘調査報告書の刊行を継続して実施している。

②　沿革

整備新幹線とは昭和 45 年（1970）に成立した全国新幹線鉄道整備法に基づいて、国鉄民営化後に施工・開業された路線を指す。昭和 39 年（1964）開業の東海道新幹線に次いで、1970 年代初頭までに着工した山陽・東北（東京～盛岡）・上越新幹線は含まれない。

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）、いわゆる長崎新幹線は、昭和 47 年７月（1972）に「建設を開始すべき新幹線鉄道の路線を定める基本計画」（基本計画新幹線）に北海道・北陸・九州新幹線（鹿児島ルート）から半年遅れて追加され、昭和 48 年 11 月 13 日（1973）に整備計画が決定した。しかし東北・上越新幹線の高騰する工事費と首都圏の線増工事に伴う大投資、ヤード方式の貨物輸送の赤字、過剰人員や人件費の高騰や国会認可の運賃値上げ抑制などの理由から国鉄財政が悪化の一途をたどる中で、新幹線建設と地方ローカル線運行の赤字、労使対立が社会問題化し、国鉄分割民営化まで新幹線の新規着工は見送られることとなった。

整備計画が決定した後も、九州新幹線長崎ルートの詳細なルート案は未定の面が大きかった。昭和 60 年（1985）に、開業時の長崎本線のルートに準じた早岐周りのルート案が公表されたものの、長崎までの距離が遠回りになることの費用対効果の分析や、JR 九州が事業者となる時の採算性の問題が浮上した。国鉄の経営の失敗に鑑み、運営主体となる JR 各社の同意なしに着工させないとの整備新幹線の合意形成システムを前提としていたためである。平成 4 年 11 月（1992）に武雄温泉から東彼杵町方面へ短絡する新ルート案を長崎県・佐賀県の地元案として提示した。長崎自動車道や古代官道ルートに准じたものである。

輸送量が大きく、採算性の高い区間から整備新幹線の着工が行われた結果、未着工の区間についても、開業した後の採算性が問題となった。平成 8 年 12 月（1996）に JR が建設費用を負担する範囲を定率ではなく、新幹線が開業した後と在来線時代の利益の差による受益額の範囲に限る建設費負担の新スキームが決定し、未着工区間の着工が進んだ。長崎ルートについては、新幹線の通らない肥前山口～肥前鹿島～諫早駅間の第三セクター鉄道への移管に際して利害の対立する沿線自治体の慎重論が障壁となった。が、平成 19 年（2007）12 月に新幹線開業後も 20 年は JR 九州が上下分離方式で営業を継続することで JR 九州・佐賀県・長崎県が三者合意し、翌年３月の国土交通省の工事認可、４月の着工に至ることとなった。工事は、工期のかかる長大トンネル区間から優先して進められた。

この段階では、在来線区間に挟まれた武雄温泉～諫早駅間については新幹線（軌間 1435mm）の線形の元に在来線（軌間 1067mm）の線路を敷設し、160km 以上の高速で走行するスーパー特急方式による運行が前提であった。しかし長崎駅までの区間を含む長崎県内の着工が問題となる中で、新幹線と在来線区間を直通運行できる軌間可変電車（フリーゲージトレイン）への期待がスペイン（カタランタルゴ・Alvia　S120 系）での成功事例の参照もあって高まった。

スペイン・ポルトガルの鉄道は 1648mm の広軌であるため、標準軌 1435mm を持つ隣国フランスの鉄道との直通運転が不可能であった。1968 年に車輪幅を走行中に変更できる Talgo Ⅲ -RD 客車が独自の１軸台車連接方式の国内特急 Talgo 車両を改良して登場し、国境での乗り換えが不要な国際直通運転が実現した。軌間可変構造のタルゴ客車は後に最高 200km にまで高速化される。更に 2006 年には日本の軌間可変電車のモデルたるべき４両編成の電車方式の高速列車 S120 系が実用化された。最高速度 250km を誇る。マドリッド・バルセロナの２大都市を結ぶ AVE 高速新線が 2003 年（マドリッド～リャイダ）・2006 年（リャイダ～タラゴーナ）の段階的な部分開業を経て 2008 年 7 月に全線開業に至る中間段階で、同区間に暫定的に投入されたのが最初である。欧州各国との共通規格を見据えて標準軌を採用した高速新線と広軌の在来線を直通し、中間駅での乗り換え抵抗を打破するためである。輸送力の大きなタルゴ方式の S103 系が追って投入され、2008 年バルセロナまで AVE フル規格新線が全通すると、輸送量の少ない地方都市間の路線に転用された。部分開通が重なる高速新線と在来線を自在に行き来し、スペイン各地の移動時間の短縮に大きく貢献している。「コンクリートから人へ」を唱える民主党による平成 21 年（2009）の政権交代により整備新幹線計画や高速道路整備計画は大きく再検討されることとなり、未着工区間の着工優先順位や費用対効果の高い方法への模索などの検討が総合的に行われることとなった。

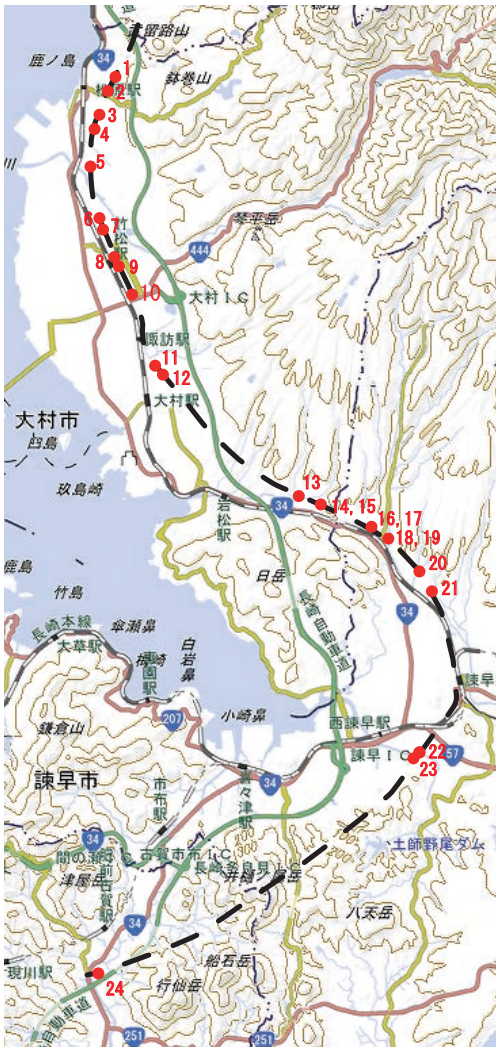
平成 23 年 10 月（2011）に国土交通省が設置した鉄道技術の専門家による軌間可変技術評価委員会により、フリーゲージトレインの基本的な走行可能性に関する技術が確立しているとの評価が下された。それを踏まえ、翌 11 月に整備新幹線問題検討会議（国土交通省政務三役・財務大臣政務官・総務大臣政務官）で未着工区間の諫早～長崎駅間を武雄温泉～諫早駅間を一体的な区間として標準軌によるフル規格路線として整備し、軌間可変電車（フリーゲージトレイン）を導入するとの方針が示された。武雄温泉駅に設けられた軌間変更設備を用いて車輪幅を替え、武雄温泉～新鳥栖駅間は在来線（複線化された長崎本線・佐世保線）を走行し、新鳥栖からは既に開業している九州新幹線鹿児島ルートに再び車輪幅を変えて乗り入れ、博多から山陽新幹線に直通することで、整備新幹線建設に伴う費用対効果を高める。平成 24 年 6 月（2012）に国土交通大臣が鉄道運輸機構に対して武雄温泉～長崎駅の全区間のフル規格での着工認可が行われた。十年後の平成 34 年度（2022）の開業が予定される。列車運行が増大する JR 佐世保線の肥前山口～武雄温泉間については複線化工事が行われる。

平成 26 年 10 月以降にフリーゲージトレイン（３次試験車両）の台車部の高速走行時の摩滅などが問題化し、安定した営業運転が可能な技術開発が 2022 年度の開業に間に合わないことが明らかとなった。平成 28 年３月に与党検討委員会や沿線自治体など６者は、武雄温泉駅で在来線と新幹線区間を乗り換えるリレー方式で新幹線を暫定開業させることで合意した。新鳥栖における新在接続の軌間変更設備と連絡線については建設が保留され、博多～長崎間で二度の乗り換えを回避するため、在来線特急は博多～武雄温泉間を直通運転することとなった。

（２）新幹線建設に伴う遺跡分布調査及び試掘・範囲確認調査の経緯

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉～諫早の建設工事着工に先立ち、長崎県教育庁学芸文化課文化財班は、新幹線建設の主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構と協議を重ね、沿線の大村市・諫早市・東彼杵町における九州新幹線西九州ルート建設工事に係る遺跡の分布調査を実施した。学芸文化課の担当者が鉄道・運輸機構および該当市教育委員会文化財担当部署の担当者を同行する形で、平成21年10月26日から30日にかけ、新幹線路線ルート沿線の現地で行われたものである。その結果、当該地域において、路線部・車両基地の範囲内の26地点で発掘調査が必要であることが確認された。また、平成23年度にも重ねて、学芸文化課の担当者が諫早市内等で現地踏査を行った。

大村市内における新幹線ルート上の遺跡に関して特記すべき事項として、戦国期の大村氏の居城である三城城に関わる工法変更が挙げられる。三城城跡を開削工法で通過する当初の工法案に関しては、城の曲輪の中核部分は避けているものの、舌状の丘陵端部に位置する城跡の地形と景観を破壊する恐れがあるとして、平成23年５月に大村市は鉄



第２図　試掘範囲確認調査対象地分布図

第１表　新幹線関係本調査履歴一覧（平成28年度まで）

年度	遺跡名	民間調査機関名	調査面積（㎡）	委託期間
平成22年度	尾和谷城跡(OWA201005)	（株）島田組	720	1/6～3/25
平成23年度	尾和谷城跡(OWA201101)	（株）イビソク	1594	4/11～6/30
	竹松遺跡(TAK201108)	（株）埋蔵文化財サポートシステム・扇精光（株）（JV）	1500	11/7～3/2
平成24年度	竹松遺跡(TAK201202)	大成エンジニアリング（株）、（株）創建（JV）	9,000	5/18～3/15
	竹松遺跡(TAK201208)	扇精光（株）・（株）三基（JV）	6,300	8/31～3/14
	中田遺跡(NAK201205)	直営	88	7/23～8/23
	専岩遺跡（SEN201206）		212	
平成25年度	竹松遺跡（TAK201301）	国際文化財（株）・（株）大信技術開発（JV）	11500	5/27～1/15
	竹松遺跡（TAK201302）	大成エンジニアリング（株）・（株）創建（JV）	13,557	5/27～3/18
	竹松遺跡（路線）（TAK201303）	扇精光（株）・（株）三基（JV）	4,720	5/27～3/14
	竹松遺跡（TAK201304）	㈱埋蔵文化財サポートシステム・㈱大信技術開発（JV）	9,900	6/27～2/24
	平野遺跡（TAK201305）	大成エンジニアリング（株）	1700	6/26～10/15
平成26年度	竹松遺跡（TAK201405）	大成エンジニアリング（株）・（株）創建（JV）	9,487	5/28～2/27
	竹松遺跡（TAK201404）	国際文化財（株）・（株）三基（JV）	7720	5/30～2/10
	竹松遺跡（TAK201407）	（株）大信技術開発・（株）プロレリック（JV）	6,876	7/1～3/6
	竹松遺跡(TAK201406)	㈱島田組・扇精光コンサルタンツ（株）	4920	7/3～2/9
	竹松遺跡（TAK201403）	（株）埋蔵文化財サポートシステム・扇精光（株）（JV）	6320	5/28～10/20
平成27年度	竹松遺跡（TAK201501）	国際文化財（株）・（株）三基（JV）	4400	5/29～1/20
	竹松遺跡（TAK201502）	（株）大信技術開発・（株）プロレリック（JV）	2800	5/29～1/7
	竹松遺跡（TAK201506）	国際文化財（株）・（株）三基（JV）	2180	8/5～2/19
	上三反田遺跡（KST201517）	（株）大信技術開発	275	1/12～2/26
平成28年度	一里松遺跡（ICH201601）	（株）大信技術開発	580	4/18～6/20
	三城城下跡（SJK201602）	大成エンジニアリング（株）・（株）創建（JV）	1470	5/25～8/26
	竹松遺跡（TAK201604）	国際文化財（株）・（株）三基（JV）	2300	6/20～10/11
	今富城跡(IMA201606)	（株）埋蔵文化財サポートシステム	420（実面積300）	10/18～11/21
	平ノ前城跡(HNM201611)	（株）島田組	220	12/7～2/8

道運輸機構に対して工法の変更を要望した。同年６月の県教育庁による申し入れを経て、平成24年６月29日の諫早～長崎駅間の追加着工を決定された際に三城城付近のトンネル工法への計画変更も認可された。

第２表　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う試掘範囲確認調査対象地一覧

	調査略号	遺跡名	所在地	期間	担当	面積（㎡）	本調査	年報	本調査対象面積	報告書号数	備考
1	NST201418	西の谷遺跡	大村市松原3丁目	20141108～0108	中尾篤志・本田	16	－	23	—	—	
2	MKJ201414	妙光寺跡	大村市松原1丁目	20140910～0924	中尾・本田	8	－	23	—	—	
3	DTB201405	大忠平遺跡	大村市草場町	20140707～0829	中尾・本田	12	－	23	—	—	
4	DID201401	大堂遺跡	大村市皆同町	20140513～0528	中尾・本田	149	－	23	—	—	工事予定地の包含層調査完了
5	IMA201409	今富城跡	大村市今富町	20140725～0728	中尾・本田	34	○	23	300㎡	本書	
6	TAK201105	竹松遺跡（車両基地・路線）	大村市竹松町・沖田町	20110704～0908	川畑・宮武・今西	257	○	20	100,633㎡	1（続刊）	2011～13年度本調査分
	TAK201204			20120702～0723	村川・宮武直人	104		21		本年度	路線。12・13年度に本調査
	TAK201213			20121030～1109	村川・山梨	66		21		本年度	路線。南半は13年度に本調査
	TAK201217			20130110～0220	村川・山梨	187		21		本年度	車両基地。2013年度調査区
	TAK201309			20131021～1202	村川・本田秀樹	232		22		未刊	車両基地。2014年度調査区
	TAK201416			20141110～0118	中尾・本田	110		23		未刊	2015年度車両基地1・2区
	TAK201503			20150601～0616	村川・川畑・田島・小川	44		24		未刊	2015年度車両基地3区TAK201506
7	HRN201212	平野遺跡	大村市鬼橋町	20121002～1018	村川・山梨	84	○	21	1,700㎡	第3集	
	HRN201313			20131216～1220	本田	8	－	22	—	—	路線東側の仮設道路用地
8	ORO201410	（仮）小路口遺跡	大村市小路口町	20140707～0829	中尾・本田	140	－	23	—	—	平野遺跡～新大村駅間
9	ORO201214	小路口遺跡隣接地	大村市小路口町	20121127～1207	村川・山梨	71	－	21	—	—	平野遺跡南側
10	SOE201002	新大村駅予定地	大村市植松町	20100720～0727	林隆弘・宮武	90	－	19	—	—	削平盛り土激しく包含層なし
11	SJK201411	三城城下跡	大村市諏訪2丁目	20140707～0829	中尾・本田	80	○	23	1,470㎡	本年度	
	SJK201515			20151104～1112	村川・川畑・川淵・堀内	60		24			
12	SJJ201607	三城城	大村市三城町	20161024～1110	浦田和彦・村川	52	-	—	—	—	
13	HNM201428	平ノ前城跡	大村市小川内町	20150209～0306	山梨・濵村一成	36	○	23	未定	未刊	
14	KIT201102	岸高遺跡	大村市中里町	20110425～0428	川畑敏則	12	－	20	—	—	
15	KIT201429	岸高遺跡（仮）	大村市中里町	20150209～0306	山梨・濵村	36	－	23	—	—	
16	OWA201003	尾和谷城跡（隣接地）	諫早市下大渡野町	20101025～1103	町田利幸・河合恭典	24	○（※）	19	2,314㎡	センター第7集	工事用仮設道路設置。本調査対象部分の試掘なし
17	OWA201307	尾和谷城隣接地	諫早市下大渡野町	20130708～0718	村川・加世田尊・野田真	22	－	22	—	—	路線壁面補強工事。本調査の北側
18	OWA201202	尾和谷城跡隣接地	諫早市下大渡野町	20120515～0522	村川逸朗・山梨千晶	54	○	21	中田遺跡：88㎡ 専岩遺跡212㎡	第1集	
19	SIS201209	新諫早SS建設予定地	諫早市下大渡野町	20120905～0914	村川・山梨	65	○	21	上三反田遺跡：275㎡	第3集	変電所予定地
20	HIR201203	平松城跡	諫早市本明町	20120613～0620	村川・山梨	12	－	21	—	—	
21	HON201317	本明町18-②区	諫早市本明町	20140120～0127	村川・松元一浩	51	－	22	—	—	分布調査で黒曜石剥片と石仏を表採
22	HRY201511	（仮称）平山遺跡	諫早市平山町	20150901～0914	村川・川畑・川淵雅行・堀内和宏	40	○	24	一里松遺跡：580㎡	—	
23	HRY201519	（仮称）平山遺跡対岸	諫早市平山町	20150215～0222	村川・川畑	8	－	24	—	—	
24	HRG201505	八郎川周辺	長崎市東町	20150629～0703	村川・川畑・堀内・小川	8	－	24	—	—	長崎市東町56km地点（仮称）

・竹松遺跡については調査面積が膨大で、試掘範囲確認調査の次数が多く、本調査との対応関係など詳細は略した
・平成22～23年度調査は長崎県埋蔵文化財センターが行い、平成24年度以降の調査は新幹線文化財調査事務所が調査主体となった

分布調査の結果を基に再度協議･検討を重ね、平成22年度の尾和谷城跡の試掘調査を皮切りに該当遺跡23ヶ所の試掘調査並びに範囲確認調査を開始した（第２図･第２表）。その結果、10遺跡の本調査が必要と判断され、平成22年度の尾和谷城本調査、平成23年度竹松遺跡保守基地から本調査が行われることとなった。その詳細は第２表に示した通りとなる。平成29年４月時点で、１遺跡の一部の調査区を除き､全ての埋蔵文化財調査を終了している。既に５遺跡の発掘調査報告書が計４冊刊行済み（第２表）である。

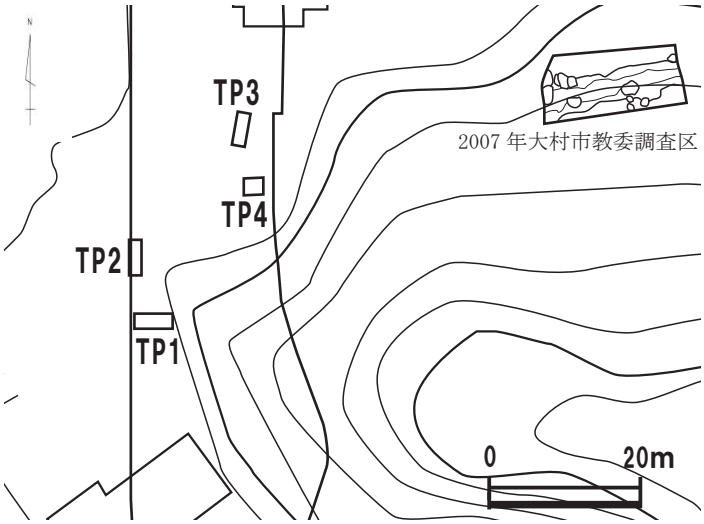
また、平成24年６月に諫早～長崎間の追加着工が認可されたことに伴い、同区間に関しても平成25年８月１日（長崎市内)、６日（諫早市内)、９月１８日（長崎市内追加調査）に、新幹線文化財調査事務所が該当市町村の担当者を同伴の上、諫早･長崎市内の新幹線路線に係る遺跡の分布調査を実施した。その結果を踏まえ､平成27年度に３遺跡の試掘調査を行った。長崎市東町56ｋｍ地点遺跡(仮称)、(仮称）平山遺跡及び東大川対岸の平山遺跡隣接地が該当する。(仮称）平山遺跡に関しては、縄文時代の良好な包含層が確認されたことから遺跡として新たに周知化を行い、小字名から「一里松遺跡」と命名した。翌平成28年度には一里松遺跡に関し、新幹線路線部分の本調査を実施した。

（３）試掘範囲確認調査の経過

平成２６年度初めの段階で、鉄道･運輸機構による公有化または地権者の同意が得られた土地を対象に試掘調査を実施した。所在地は長崎県大村市皆同町486番地10他である。調査期間は平成26年７月22日から７月25日までであり、同じく新幹線路線建設にかかる三城城下跡の範囲確認調査を一体的に続けて実施した。調査略号はIMA201409である。

①　調査区の設定

丘陵部の今富城の残存する曲輪に隣接した低地部一帯に２×５ｍの調査坑を３箇所、２×２ｍの調査坑を１箇所の計４箇所を掘削した。調査坑の配置は第３図に示した。TP １･２は宅地跡であり､TP ３･４は畑地である。調査面積は計34㎡となる。



第３図　試掘坑配置図（1/1,000）

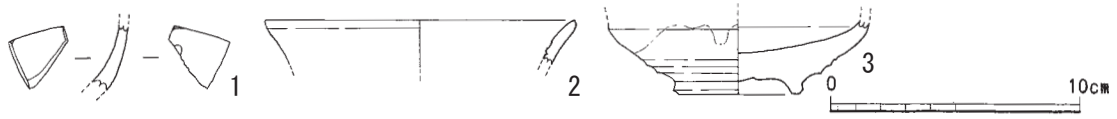
②　土層

TP １～３の土層を第5図～第7図に示した。宅地跡に設定したTP １･２では、にぶい赤褐色を呈する近現代の整地層が10～30cm堆積し、直下に地山の黄褐色ないし褐色の風化礫層（２層:10YR5/6, 2’層:7.5YR4/6）を検出した。畑地のTP ３･TP ４では20～30cmの耕作土の下から地山の黄褐色礫層を検出した。いずれの調査坑も削平が激しく、中世以前の包含層は確認されなかった。

③　遺構･遺物

第３表　範囲確認調査出土遺物観察表

図版番号	器種	出土地点	部位	法量（cm）			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
1	青磁椀	TP3	胴部	—	—	—	施釉	施釉	にぶい黄橙色		良好	やや良	龍泉窯系
2	白磁碗	TP3	口縁部	12.3	—	—	施釉	施釉	灰白色	灰白色	良好	やや良	
3	陶器椀	TP2 表採	底部	—	—	4.8	施釉	露胎／施釉	灰白色	にぶい橙色	良好	良	

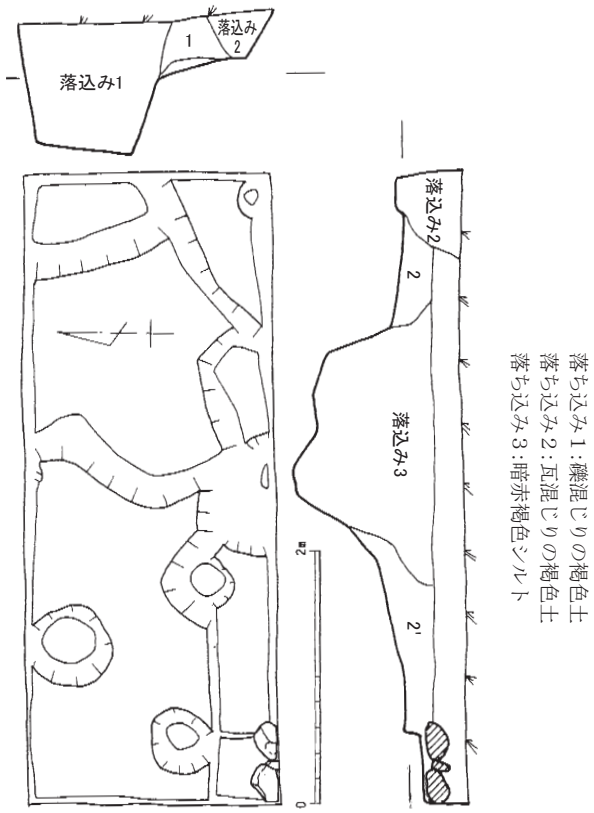


第４図　範囲確認調査出土遺物実測図（1/3）

写真１　範囲確認調査出土遺物

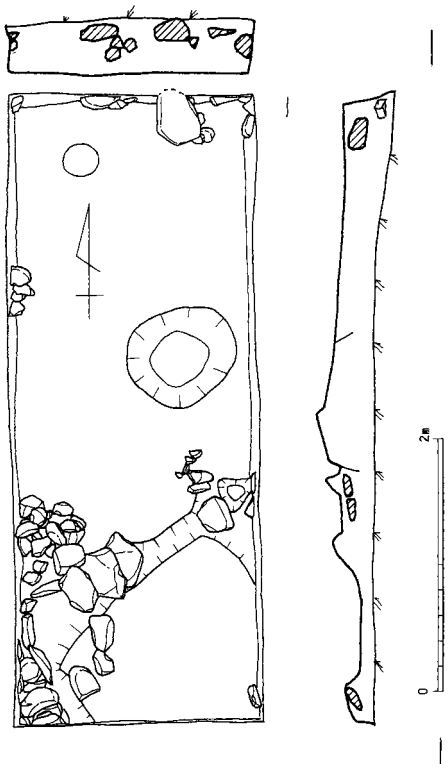
いずれの調査坑でも中世以前の遺構は見出されなかった。TP1･2では地山の基盤礫層に掘り込む形で、褐色ないし暗赤褐色粘質土から成る近現代の撹乱土坑を確認した。TP ２では近現代の

写真２　TP1　完掘状況（西から）

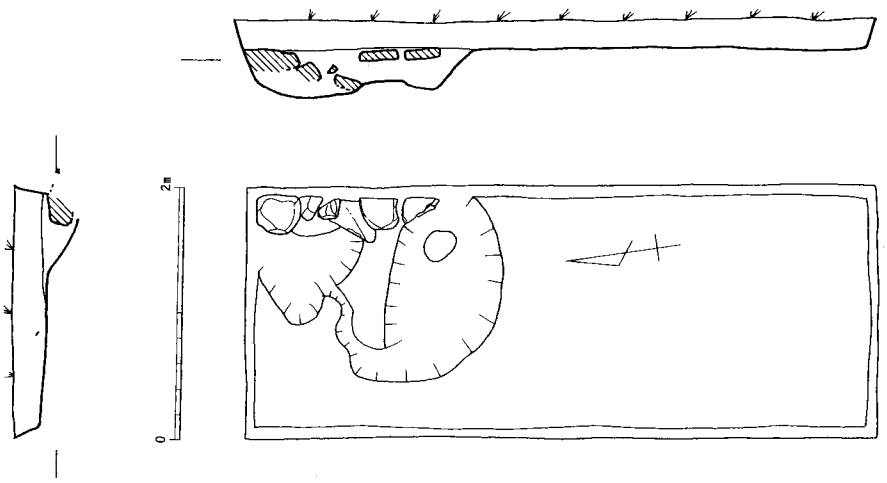


第５図　TP1 平面・土層実測図（1/60）

写真３　TP2　完掘状況（南から）



第６図　TP2　平面･土層実測図（1/60）



第７図　TP3 平面・土層実測図（1/60）

住宅に関わる石列を検出した。いずれの試掘坑でも、中世以前の遺構は確認されなかった。畑地跡のTP ３では廃棄土坑と思われる落ち込みを検出したものの、近現代の耕作に伴うものと判断した。TP ４はわずかな表土の下は地山の礫層に達し、遺構･遺物の出土は見られなかった。

近世以前の遺物としては３点が出土した。(陶磁器に関わる参考文献については本調査の項（Ⅳ-3）を参照のこと)。１は龍泉窯系の青磁椀で、施釉が薄くシャープな作りで無文である。上田分類のD-1類に該当し、口縁部は外反するものと推定される。瀬戸分類の青磁Ⅳ類新相に当たる（瀬戸2017）もので、沖縄編年では1350～1420年頃に相当する。あるいは釉薬の薄さに着目すれば、12世紀の龍泉窯青磁椀Ⅰ類（山本信夫2000）の可能性もある。２は白磁皿の口縁部片である。口縁部の鋭角な特徴と口径（復元12.3cm）から白磁Ⅶ類と考えられる。屈曲は観察されないが、内面下端に沈線が見られ、やや大振りなⅦ-2類に比定される。玉縁の白磁椀Ⅳ類と同じく、大宰府編年C期（11世紀終わり～12世紀前半）の標識遺物である。TP ３の耕作土中からの出土であり、原位置は保たれていない。３は

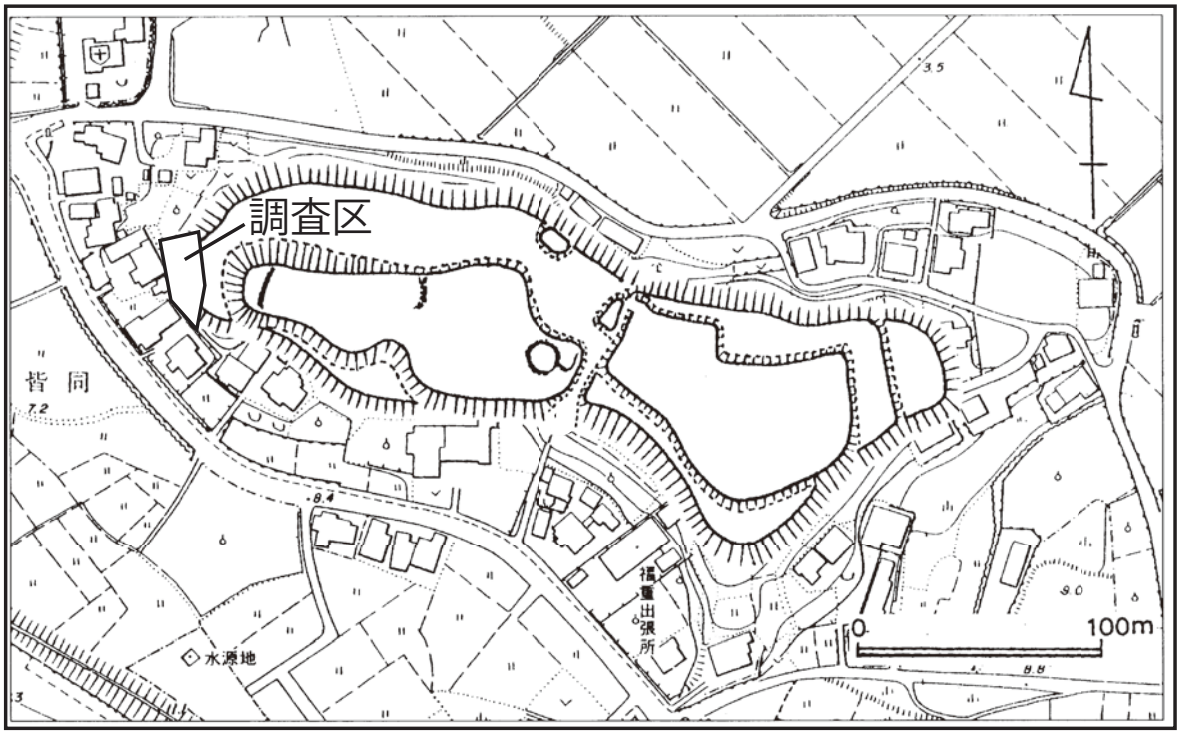
近世の陶器皿の底部である。唐津産と考えられる。内面は施釉されるが数ヶ所の釉剥ぎが見られ、外面上部には施釉及び釉薬のタレが見られる。その他、TP１･TP ２では近現代の陶磁器類や丸瓦、レンガなどが多く出土している。

写真４　TP ２・１掘削作業風景

④　結果

試掘調査では遺構を検出することが出来なかった。遺物は少量出土したものの、近現代のものを除けば畑地の耕作土中からの出土であり、原位置は保たれていない。低地の範囲に関しては本調査の必要はなく、工事着工に支障はないと判断した。

新幹線路線は今富城の曲輪そのものを切り土することから、曲輪部分に関しては本調査が必要であると判断した。近隣の低地の宅地にも中世後期の石塔が祀られていることから、墓地などの中世の遺構が残存する可能性がある。新幹線の建設以降も今後の周囲の開発に関しては、周知の遺跡範囲の隣接地に対しても試掘調査を行うことが望ましい。



第８図　今富城縄張図（寺田正剛 2014 より）

〔参考文献〕
寺田正剛2014「第3節　大村市周辺における中世城館」『新編大村市史』第2巻（中世編）　大村市史編纂委員会

２　調査組織

今富城跡の発掘調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が調査主体として担当した。本調査に際しては、発掘調査業務の一部（安全管理･発掘作業員の雇用･労務管理･測量･遺構実測･空中写真撮影･その他の仮設業務）を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、両者の調査員が合同して現場調査に当たった。

新幹線路線ルート上にかかる遺跡分布調査の段階を含め、今富城跡にかかる調査組織および調査期間･面積は、次のとおりである。この間、平成２２年１月に壱岐市に長崎県埋蔵文化財センターが設置され、尾和谷城及び竹松遺跡保守基地（TAK201108）の二地点の本調査を実施した。それ以降の地点の埋蔵文化財調査に際しては、平成24年度から県教育庁の地方機関として新たに新幹線文化財調査事務所を設置して、新幹線関係の調査を担当することとなった。10万平米を超える規模となった竹松遺跡内の新幹線車両基地の範囲を中心とする大規模な発掘調査を効率的に実施する体制を構築するためである。

なお、職名は全て当該年度のものである。

（１）平成２１年度　遺跡分布調査

長崎県教育庁学芸文化課　課長　水畑　順作
企画監　川久保　芳洋　総括課長補佐　辻　宏幸
専門員　高野　晋司
文化財班　課長補佐　古門　雅高　係長　冨田　和宏
主任文化財保護主事　福田　一志（10月18日逝去）
文化財保護主事　寺田　正剛（調査担当）
文化財調査員　平田　賢明（調査担当）〔現小値賀町教委〕

（２）平成２３年度　遺跡分布調査

長崎県教育庁学芸文化課　課長　川久保　芳洋　総括課長補佐　稲田　栄司
専門員　高野　晋司
文化財班　課長補佐　古門　雅高　係長　寺田　正剛（調査担当）

（３）平成２６年度　試掘範囲確認調査

新幹線文化財調査事務所　所長　古門　雅高　課長　杉原　敦史　田尻　清秀
係長　村川　逸朗　主任主事　浜口　広史
調査担当　主任文化財保護主事　中尾　篤志
文化財保護主事　本田　秀樹

（４）平成２８年度　本調査

新幹線文化財調査事務所　所長　古門　雅高
課長　杉原　敦史　小島　克孝
係長　中尾　篤志
主任主事　浜口　広史　（～9月30日）
主事　水口　真理子（10月１日～）
班長（文化財調査員）　村川　逸朗

調査担当　　文化財保護主事　濵村　一成　　文化財調査員　新久保　恒和

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

現場代理人　山下　貢司　　調査員　大坪　芳典

（５）平成２９年度　報告書作成

新幹線文化財調査事務所　　所長　古門　雅高　　課長　小島　克孝

主事　水口　真理子

報告書担当　　課長　杉原　敦史　　係長　中尾　篤志

主任文化財保護主事　川畑　敏則

文化財調査員　堀内　和宏

３　発掘作業の経過

範囲確認調査の結果に基づき、用地買収の終了を待って、今富城の曲輪部分について本調査を平成28年10月18日から11月21日にかけて実施した。調査面積は420㎡である。調査区の位置は第13図に示したように、今富城跡の西側斜面に位置し、2007年度の大村市教育委員会の調査地はその北東方向に位置する。調査区のグリッド配置等は、Ⅳ調査の概要　２調査の方法の節に記した（第12図参照）。調査期間中は、竹松遺跡の調査の場合と同様に、新幹線文化財調査事務所の発掘調査体制の基準に従い、県の調査員及び民間の現場代理人・調査員が調査中は調査現場に共に常駐して、当該遺跡の発掘調査に専従する態勢を取った。

調査前の調査区の現況は竹林であったが、伐採までの段階は鉄道運輸機構及び工区JV（東亜・オリ

写真５　調査前伐採風景

エンタル白石・大石JV）が行い、表土掘削以降の段階が調査サイドの分担となった。専門業者に委託して行われた伐採・搬出作業に際しては、新幹線文化財調査事務所の濵村・村川が立会いを実施した。その際に改めて確認したところでは、曲輪の西側端部は現況の竹林が繁茂する以前の段階で削平を受けている可能性が高く、明治期の鉄道建設（現JR大村線）の建設時の土取り等の地形改変の影響は、従来から指摘されているように拭いがたいことがうかがわれた。

10月11日の入札結果を受け、本調査に先立ち、10月14日に落札者の株式会社埋蔵文化財サポートシステム（以下埋文サポート）と新幹線文化財調査事務所の間で契約を締結し、両者の関係者で初回協議を行った。10月18日から10月31日までの期間は発掘調査のための準備工のために当てた。調査区の周囲は削平を受けているものの、端部が崖状を成す曲輪部分との比高差が７m程度あり、昇降階段の設置などの安全対策に十分な配慮を行った。20日までに昇降階段の設置を完了し、21日に調査前現況の地形測量を行った。26日にはラジコンヘリを使用して現況地形の空撮を行った。28日までに順次、現場棟４棟（県調査員棟・埋文サポート棟・作業員棟・倉庫棟）を搬入し、31日にバックホウ、水中ポンプ、発電機、タンク類等の搬入を行った。

10月28日に埋文サポートが行った作業員雇用説明会を受けて、11月１日から発掘作業員による人力掘削を開始した。1日あたりの作業員数は８名である。調査区の比高差に配慮して、掘削作業による排土はラフテレーンクレーン、バックホウを使用して運搬した。３日まで腐葉土の掘削と遺構検出に努め、石積の想定地点や巨石付近から陶磁器類を取り上げた。４日には２回目の空撮（写真６）を行い、石組を中心とする遺構実測に転じた。出土した遺物には城の年代と重ならない縄文時代の黒曜石剥片石器や中世前期の白磁等が目立ったものの、８日には漳州窯系の明青花皿の出土を確認した。崖下の下段部については８日に重機掘削による下層確認を実施し、既に遺構面及び包含層が失われていることを確認した。10日に掘削作業を終了し、調査区の完掘状況を撮影した。11日に掘り道具や大型機材の片付け、搬出を行い、作業員雇用を終了した。同日には、大村市市史編纂室の大野安生室長及び市教委文化振興課の安樂哲史・柴田亮学芸員の訪問を受けた。その後、県・埋文サポート双方の調査員が地形測量、土層図・遺構図作成を継続した。17日には中世山城に詳しい大村城南高校の林隆弘教諭（元長崎県埋蔵文化財センター文化財保護主事）の訪問と助言を受けた。同日に完掘土量検査を実施した。18日に昇降階段を撤去して、所定の11月21日までに業務完了検査、成果品の納品を実施し、全ての調査を終了した。

以上の記述には、県新幹線文化財調査事務所並びに埋文サポートの調査日誌の記載を参照した。

４　整理作業の経過

現場段階で濵村・新久保が遺構台帳、写真台帳等の調査記録の作成を進めた。現場での発掘作業終了後に久原現場事務所に於いて、濵村の指示監督の下に新久保が遺物の洗浄作業、分類、個別登録遺物の抜き出し、注記作業を実施し、遺物台帳、写真台帳を作成した。

平成29年４月からは濵村の学芸文化課への異動・昇任を受け、堀内が調査記録及び遺物の整理、報告書作成業務を引き継いだ。同年６月１日には久原現場事務所において、野上建紀氏（長崎大学多文化社会学部教授）から出土陶磁器に関する調査指導を受けた。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

①今富城跡
②野田の久保遺跡
③野田古墳
④野田Ａ遺跡
⑤葛城遺跡
⑥玖島城跡
⑦大村館
⑧三城城跡
⑨黒丸遺跡
⑩竹松遺跡
⑪富の原遺跡
⑫冷泉遺跡
⑬稗田遺跡
⑭野岳遺跡
⑮黄金山古墳
⑯小路口鬼の穴古墳
⑰地堂古墳
⑱岩名遺跡
⑲沖田黒丸条里
⑳大上戸川条里
㉑好武城跡
㉒小路口遺跡
㉓平野遺跡
㉔川端遺跡
㉕立小路遺跡
㉖寿古遺跡
㉗石走古墳群１号墳
㉘石走古墳群２号墳
㉙石走遺跡
㉚山の上石棺
㉛八竜古墳
㉜憩場石棺

第９図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

１　地理的環境

大村市は長崎県本土部のほぼ中央に位置し、西側に大村湾が広がっている。大村湾は北の細い二つの瀬戸でわずかに外海に接する完全な内海であり、西岸はリアス式海岸で入り組んだ地形を呈するのに対し、大村市の属する東岸は弧状を描く。北で東彼杵郡東彼杵町、南で諫早市に接する。東は、標高1,000m級の山々が連なる多良山系を挟んで佐賀県と接する。多良岳を源として、市内最大である２級河川の郡川が流路を築き，萱瀬地区の谷を削り、下流に土砂を堆積しながら大村湾へと注ぎ、南北約7.5km，東西約2.5kmの広がりを持つ大村扇状地を形成している。平野としては県内本土部で最大の広さである。

今富城①の南西側には郡川が南北方向に流れ、好武城の丘陵部にぶつかる形で流路を西に転じる。郡川の現在の流路はボーリング調査の結果から、自然の堆積作用により形成されたものと考えられているが、好武城を右に避け、北側の松原方向へ直進する支流も過去に存在したことが想定される。

２　歴史的環境

郡川中下流域には、縄文時代から現代に至るまでの生活の痕跡を残す多くの遺跡が分布し、恒常的に生活圏が形成されてきた。当遺跡の近隣の遺跡としてはまず、郡川の下流左岸には、縄文時代晩期から弥生･古墳･中世までの大規模複合遺跡であり、古代の沖田条里跡⑲を含む黒丸遺跡が展開する。その南方には石棺墓や甕棺墓による墓域を伴う弥生時代中期の環濠集落である富の原遺跡⑪がある。右岸には弥生時代終末期から古墳時代初頭の石棺墓を検出した冷泉遺跡⑫、それに隣接して５世紀初頃から中ごろに築造されたと考えられる竪穴系横口式石室を持つ黄金山古墳⑮が存在する。その北側の低湿地の水田域の周りに、地堂古墳⑰･石走古墳㉗㉘など小規模な古墳を多くめぐらせることも注目される。古墳時代には大村湾の海水が入り込む入海であったことが想定されている。日本海岸の潟湖に面した遺跡の事例（森浩一1983･1994、島根県古代文化センター編2015）に見られるように、この地を拠点とする豪族が、大村湾を中心とする海の交通を意識した社会活動を営んでいたことが考えられる。

郡川中流域は「こおり」の地名や沖田条里遺構⑲から、古代には「彼杵郡」の郡家の比定地の一つである。彼杵郡は８世紀前半の『肥前国風土記』編纂段階で４郷、平安期の『倭名類聚抄』には併合されて２郷から成り、その内の大村郷に属していたと考えられる。中世後半には地方豪族として大村氏が頭角を現し、郡川河口域に好武城㉑、隣接して今富城⑭を築き、大上戸川流域の大村館･三城城と並ぶ政治･軍事的拠点とした。

竹松遺跡⑩では九州新幹線長崎ルートの路線･車両基地の建設に伴い、長崎県教育委員会によって平成23年度から10万㎡を超える範囲で発掘調査が行われている。南部の流路付近を中心に縄文早期、前期の石器･土器や狩猟に伴う落とし穴、北部で弥生の竪穴建物跡やガラス玉、32基の箱式石棺墓･甕棺墓･土壙墓から成る墓域･祭祀遺構、古墳時代の円墳、祭祀関係の外来系土器、集落域、古代の墨書･刻書土器、彼杵郡家･郡津との関係が想定される「木都」刻書紡錘車、中世の一町区画溝から成る居館跡などが出土している。遺物遺構年代は縄文から連綿と続くが１４世紀に断絶し、近世の陶磁器、各種土製品などの出土品に年代が飛ぶ。竹松遺跡と周囲の集落の消長と関係するものと思われる。

郡川の北東に位置する武留路山は山頂部で標高三四一mの円錐形をなし、大村湾を北から航行した

り、東海岸沿いを陸路で南下する場合のランドマークとしての性格を有している。また古代の烽としての性格も想定されている（大村市史編纂委員会2013・村川2015）。現在の東彼杵町中心地を経由する海岸沿いの古代の奈良時代の官道の旧駅路、松原から北東に高度を上げて武雄盆地方面に向かう『延喜式』の九世紀の駅路ルートの双方に近接することも『軍防令』に定められた烽の運用方法（村川2015・堀内2017）のためにも好都合であり、武留路山が烽に比定される一論拠となっている。

竹松遺跡の南方の平野遺跡㉓は古墳時代の遺物散布地として周知されており、個人住宅などの建設に伴って大村市による小規模な発掘調査が行われている。その東側には弥生時代の環濠の存在が推定されている川端遺跡㉔があり、地形的な境界はないことから一体的に遺跡が続いており、二つの遺跡は接続するものと考えられる。その南方に立小路遺跡（縄文後期～弥生）㉕が立地する。平野遺跡㉓では九州新幹線長崎ルートの路線建設に伴い、平成25年度にJR大村線の東側で本調査（1,700㎡）が行われた。遺構は郡川の氾濫による土石流などで失われていたが、縄文後期の扁平打製石斧、古墳時代の土師器・高坏・方頭式有茎鉄鏃、中近世の貿易陶磁などが包含層から出土した。

竹松遺跡の平成27年度都市計画道路調査（TAK201504）では11世紀後半の規格的に配置された掘立柱建物数棟と柱列が見つかっている。陶磁器の出土量は少ないが、土師器の編年を基準とすれば、大宰府陶磁器編年B期に相当する。竹松遺跡では当該期の遺物として出土地が稀少な越州窯青磁Ⅲ類が12点出土した。長崎県下で初めての出土である（川畑・堀内2016）。

時期的にそれに次ぐものとして、竹松遺跡や周辺の冷泉遺跡⑫、寿古遺跡㉖（好武城㉑）の出土遺物の中で、11世紀終わりから12世紀前半（大宰府陶磁器編年C期）の貿易陶磁の標識遺物である大きな玉縁口縁を有する白磁碗Ⅳ類の遺物量は卓越する状況を見せる。その出土傾向は松浦市今福遺跡や佐世保市門前遺跡とも軌を同じくする。竹松遺跡の調査では、この時代の遺構としては、西側では平成24年度車両基地調査（TAK201202）と平成26年度車両基地３区（TAK201405）にまたがって一町（108m）の区画溝で囲まれた豪族居館も見つかっている。

竹松遺跡の調査の出土品からは、鹿児島県徳之島産の中世無釉陶器たるカムイヤキが西九州で初めて確認され、同時に朝鮮半島産の初期高麗の無釉陶器も出土している。南九州から奄美地域、琉球諸島にかけての遺跡からは12・13世紀の西彼杵半島産の滑石製石鍋が広汎に出土しており、出土遺物の面からこの時代の朝鮮半島～五島列島～大村湾沿岸～薩摩～喜界島～琉球諸島とつながる交易ルートが復元される。阿多忠景の活動年代、ことに薩摩国阿多郡から喜界島に逃れた年代（堀内2016参照）とも重なる点も注意されよう。9世紀以降の肥後国府の推定地である熊本市二本木遺跡群、南さつま市の持躰松遺跡や喜界島の城久遺跡群など南九州・奄美諸島一円の地域を海上ルートでつなぐ12世紀前半の交易活動の盛行が窺われる。文献史料に見える薩摩平氏と肥前平氏の系譜的結合（野口実1991・1995）と、荘園を中心とした交易活動と符合する（堀内2016）。

中世には大村市域は摂関家領荘園の彼杵荘に含まれ、荘官として大村氏の人名が散見される。戦国期の大村氏との関係は定かではなく、藤原純友を祖先とする大村氏の祖先系譜も元禄期の架上による。江戸期の編纂史料が伝える16代純伊以前の事績には編纂時期の相違による混淆が見られる。大村市立史料館所蔵の大永３年（1523）の純伊銘五輪塔地輪には、「平朝臣」の表記が見られる。諫早大水害（1957年）の際に三城城の北側の曲輪Ⅲから出土したと伝えられる遺物であるが、鎌倉期前後の文書に見える荘官大村氏の氏姓が平朝臣であることと符合する。15世紀後半以降、大村氏は、郡川河口域に好武

城㉑、隣接して今富城①を築き、やや南方の大上戸川の扇状地に大村館と周辺の武家居住地（三城城下跡⑧）を形成することとなる。

『大村郷村記』の今富城の項では、大村館に居していた純伊が今富城の城下館跡・石垣を築いたとする。純前以前の大村氏に関しては、近世編纂史料に対する史料批判が行われているところであり（外山幹夫1986・大村市史編纂委員会2014）。今富城が大村館に代わる大村氏の恒常的な支配拠点であったかは定かでない。以下の三城城下跡との前後関係に関わる問題だが、従来は江戸時代の二次的な編纂史料の断片的な記載から議論されており、近年の大村市・長崎県教委の発掘調査により、中世都市の様相が明らかとなりつつある。

三城城下跡の中心である大村館⑤の起源は明確ではなかったが、発掘調査に伴う遺物からは11・12世紀の中国産貿易陶磁に次いで、15世紀の防長系擂り鉢などが見えており、15世紀までの段階で三城城下が武家地として使用されていた実態が窺える（大野・松川・安樂2007）。地方に小京都の景観が展開する「花の御所体制」（小島道裕2005）による政治拠点化が進行していたと思われる。大村館付近では15世紀までに宝生寺・円福寺・蓮福寺の三寺が建立され、16世紀までに９寺２坊に拡大する。

大村館から三城城への大村純忠の移転時期は、永禄７年（1564）と江戸期の編纂物に共通して記載される。しかし、前年の横瀬浦襲撃事件に関わるフロイス書簡や平戸藩士編纂の『三光譜録』に共通して町の近くの城への避難を記すことから、その以前から何らかの緊急時の避難機能を持っていたと推測される。この戦乱を契機として居所機能を有する城への改修工事、移転が行われたと思われる（大野2005）。三城城を築いた後も今富城は大村の北方の守りを固めるべき重要拠点であり、永禄９年（1566）の後藤貴明との野岳合戦でも大村純忠は今富城に入り、そこから出陣している。

純忠の次代の喜前の代に三城城から玖島城⑥に大村氏の拠点が移り、家臣団も移動して江戸時代につながる。玖島城を中心として再び武家地、商人地、寺院地から成る市街地が再編成される。

大村藩の城下町であった大村は、明治以降には行政的な中心性を失って衰退を見るが、明治29年（1896）に陸軍歩兵第二十三旅団司令部が置かれ、翌年から歩兵第４６連隊が放虎原に駐屯する。歩兵46連隊は熊本の第十二師団に隷していたが、久留米の第十八師団の配下であった時期もある。陸軍部隊の衛戍地となったことで、以後の大村は軍都としての発展を見せる。陸海軍の基地が地域で著しく大きな比重を示す地方都市について、「軍都」との地域呼称は全国各地に見られるが、大村に関しては上からの政策的な形成過程よりは、地域振興と交通路整備などを目的として住民が積極的に「軍都」としての性格を呼び寄せた面が大きいことが指摘される（大村市史編纂委員会2016）。

海軍についても、大正12年（1923）には海軍航空隊が置かれる。現在の富の原付近に置かれ、1100×1200m（後に1600×1400m）の規模を誇った。昭和16年（1941）10月には軍港佐世保の海軍工廠の航空機製造部門を移転拡充して、第21海軍航空廠が開設される。航空廠は全国５ヶ所（他は霞ヶ浦・木更津・広島県広・台湾高雄）に置かれたもので、大村の第21海軍航空廠は210haの敷地に180もの建物を持ち、鹿屋（鹿児島）・鎮海（朝鮮総督府統治下慶尚南道）・元山（同江原道）の各支廠を統括下に置く東洋最大の航空機生産工場＝官庁であった（第21海軍航空廠殉職者慰霊塔奉賛会編1999）。同年12月の太平洋戦争の開戦と共に順次生産体制の整備が図られ、1943年10月には全面的な生産工程が完成した。動員学徒8000人以上や徴用工を含め、一時的な滞在を含めた軍隊関係者の人口は5万人以上にも達した。国鉄大村線から海岸部にかけての平地は戦時中にはことごとく陸海軍の基地として利用さ

れたといって過言でなく（第16図参照）、国道西側の旧集落に関しても移転が行われた。山麓部には米軍の空襲を避けるように山裾部に多くの軍需工場が置かれ、大村は軍都としての様相を示した。陸海軍関係の人口の急増に伴い、1939年には大村町が西大村･竹松町を合併し、更には人口の急増に伴い、1942年に周辺の村を合併する形で市制が施工される。

今富城跡①には海軍の高角砲陣地（皆同砲台）が築かれ、曲輪の中心部分は損壊を受けた。海軍滑走路への空襲に備えて、今富城と郡川の間の平野に海軍の補助滑走路が置かれた。軍事拠点としての性格からアメリカ軍の空襲は激しく、国鉄大村線沿いに平野遺跡などから不発弾の出土が見られ、爆発に伴う大型の撹乱孔も竹松遺跡の調査地から見つかっている。

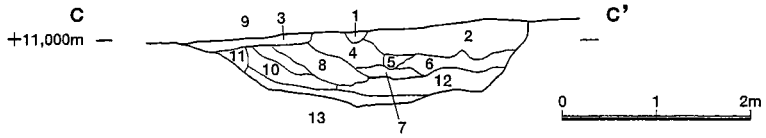
〔参考文献〕
稲富裕和他 1987『富の原』（大村市文化財調査報告書第１２集）
浦田和彦・堀内和宏・東郷一子 2017『平野遺跡』（新幹線文化財調査事務所調査報告書第２集）
大野安生・松川憲毅・松尾尚哉 2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 vol3』（ 大村市文化財調査報告書第 23 集 ）
大野安生 2005『三城城跡範囲確認調査報告書』（大村市文化財調査報告書第 29 集）
大野安生・松川憲毅・安樂哲史 2007『市内遺跡発掘調査概報１』大村市文化財調査報告書第 30 集
大村市史編纂委員会 2013『新編大村市史』第１巻（自然・原始・古代編）大村市
大村市史編纂委員会 2014『新編大村市史』第２巻（中世編）大村市
大村市史編纂委員会 2016『新編大村市史』第４巻（近代編）大村市
海軍航空廠殉職者慰霊塔奉賛会編 1999『放虎原は語る　～大村大空襲と第二十一海軍航空廠～』
川畑敏則・堀内和宏 2016「大村市竹松遺跡の調査概要（ 古代～中世 ）」（『9 ～ 11 世紀における大村湾海域の展開～東アジア世界の中の竹松遺跡～』長崎県考古学会）
木本雅康　2011「肥前国彼杵・高来両郡における古代官道」『古代官道の歴史地理』同成社（初出 2000）
久田松和則 1981「築城以前の三城周辺」（『大村史談』21 所収）
小島道裕　2005『戦国・織豊期の都市と地域』青史出版
島根県古代文化センター編 2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』（島根県古代文化センター研究論集 15）
新川登亀男他 1998『長崎県の歴史』山川出版社
竹内理三・瀬野精一郎・田中健夫 1980『長崎県史　古代中世編』長崎県
第 21 海軍航空廠殉職者慰霊塔奉賛会編 1999『放虎原は語る』大村市
武部健一　2005『完全踏査　古代の道　続』（木下良監修）吉川弘文館
外山幹夫　1986『中世九州社会史の研究』吉川弘文館
　　2011『中世長崎の基礎的研究』思文閣出版
野口実　1991「鎮西における平氏系武士団の系譜的考察」（『中世東国武士団の研究』高科書店・1994 所収）
　　1995「薩摩と肥前」（『鹿児島中世史研究』第 50 号）
堀内和宏 2016「肥前平氏と薩摩・南島との交流について」（『9 ～ 11 世紀における大村湾海域の展開　～東アジア世界の中の竹松遺跡～』長崎県考古学会秋期大会資料集）
　　2017「竹松遺跡と西日本の村落寺院」（『民衆史研究』第 93 号・民衆史研究会）
村川逸朗 2015「長崎県域等に於ける古代の烽ネットワーク復元に向けてのアプローチ」（『高野晋司氏追悼論文集』2015 所収）
森浩一　1983「日本海の古代文化と考古学」（森浩一編 1983『古代日本海文化』小学館）
　　1994『考古学と古代日本』中央公論社

Ⅲ　過去の調査

今富城については、歴史的環境の節で述べたように、『大村郷村記』に大村純伊の居城であったことが明記されており、異論なく現在地に比定されてきた。発掘調査の機会を長く得なかったが、中世城郭への関心の高まりの中で、2007年に大村市教育委員会が埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施した。携帯電話の基地局建設に伴うものである。文化財を保護するため事前の調整を行った結果、建設地候補として曲輪の主郭部を外し、曲輪先端中腹部への変更が図られ、包含層・遺構が残存する北側部分に限って記録保存のための本調査が行われた。調査期間は2007年７月18日から９月３日までで、200平米の範囲が調査された。調査区の位置は第13図に示した通りである。

出土遺物はわずかで、いずれも空掘の埋土上層から出土した。中世前期の玉縁口縁の白磁Ⅳ類や龍泉窯系青磁の他､城の使用時期と一致するものとしては景徳鎮系の染付皿C群（小野分類）や瓦質茶釜、緑泥片岩製の五輪塔水輪、火薬調合時の乳皿と想定される凝灰岩製石皿が出土した。出土遺物の様相は今回の新幹線建設に伴う調査で出土したものと酷似している。遺構としては、東西方向に逆台形の空堀（第10図）を検出した。埋没は自然堆積によるものではなく、一斉に人為的に埋められたと確認された。その時期は出土遺物の下限年代によって17世紀初期と想定される。

〔参考文献〕
安樂哲史2008『今富城跡―携帯電話無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』大村市文化財調査報告書第32集



土層C
①暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）　しまり弱い
②暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）　褐灰色土ブロックを部分的に含んでいる。
③暗褐色土（Hue7.5YR 2.5/4）　やや赤みがかった色調を呈する。
④褐色土（Hue7.5YR 3/4）　オリーブ色土ブロックを全体に多く含んでいる。
⑤黒褐色土（Hue10YR 2/3）　褐灰色土ブロックを全体に多く含んでいる。
⑥褐色土（Hue7.5YR 4/3）　オリーブ色土ブロックを全体多く含んでいる。
⑦褐色土（Hue7.5YR 4/3）　粘性強い。
⑧褐色土（Hue7.5YR 4/3）　⑥と酷似している。オリーブ色土ブロックを多く含んでいる。
⑨暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）　褐灰色土ブロックをごく少量含んでいる。
⑩褐色土（Hue7.5YR 4/3）　オリーブ色土ブロックを全体に多く含んでいる。
⑪暗褐色土（Hue7.5YR 2.5/4）　しまりが強く、褐灰色土ブロックを部分的に含んでいる。
⑫暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）　オリーブ色土ブロックを部分的に含んでいる。
⑬暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）　褐灰色土ブロックをごく少量含んでいる。

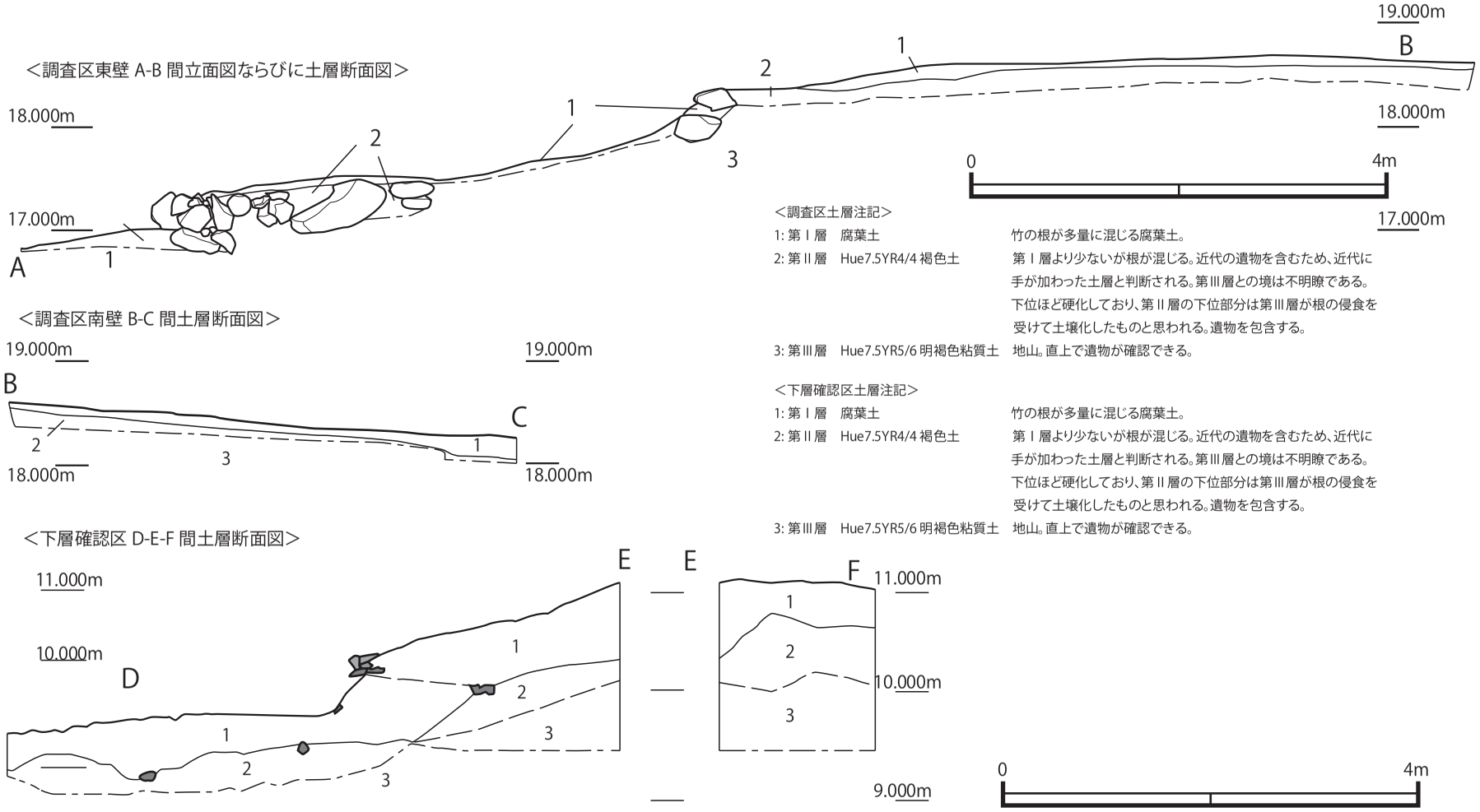
第 10 図　空堀遺構実測図（1/80）

Ⅳ　調査の概要

１　基本層序

本調査における基本層序は以下のように示される。

第Ⅰ層	腐葉土	竹の根が多量に混じる腐葉土
第Ⅱ層	褐色シルト(7.5YR4/4)	遺物包含層。根が混じる。近代の遺物混じる。第Ⅲ層との境界は不明瞭である。下位ほど硬化しており、漸移層については第Ⅲ層が根の侵食を受けて土壌化したものと思われ
第Ⅲ層	明褐色粘質土（7.5YR5/6）	地山



＜調査区土層注記＞

1: 第Ⅰ層	腐葉土	竹の根が多量に混じる腐葉土。
2: 第Ⅱ層	Hue7.5YR4/4 褐色土	第Ⅰ層より少ないが根が混じる。近代の遺物を含むため、近代に手が加わった土層と判断される。第Ⅲ層との境は不明瞭である。下位ほど硬化しており、第Ⅱ層の下位部分は第Ⅲ層が根の侵食を受けて土壌化したものと思われる。遺物を包含する。
3: 第Ⅲ層	Hue7.5YR5/6 明褐色粘質土	地山。直上で遺物が確認できる。

＜下層確認区土層注記＞

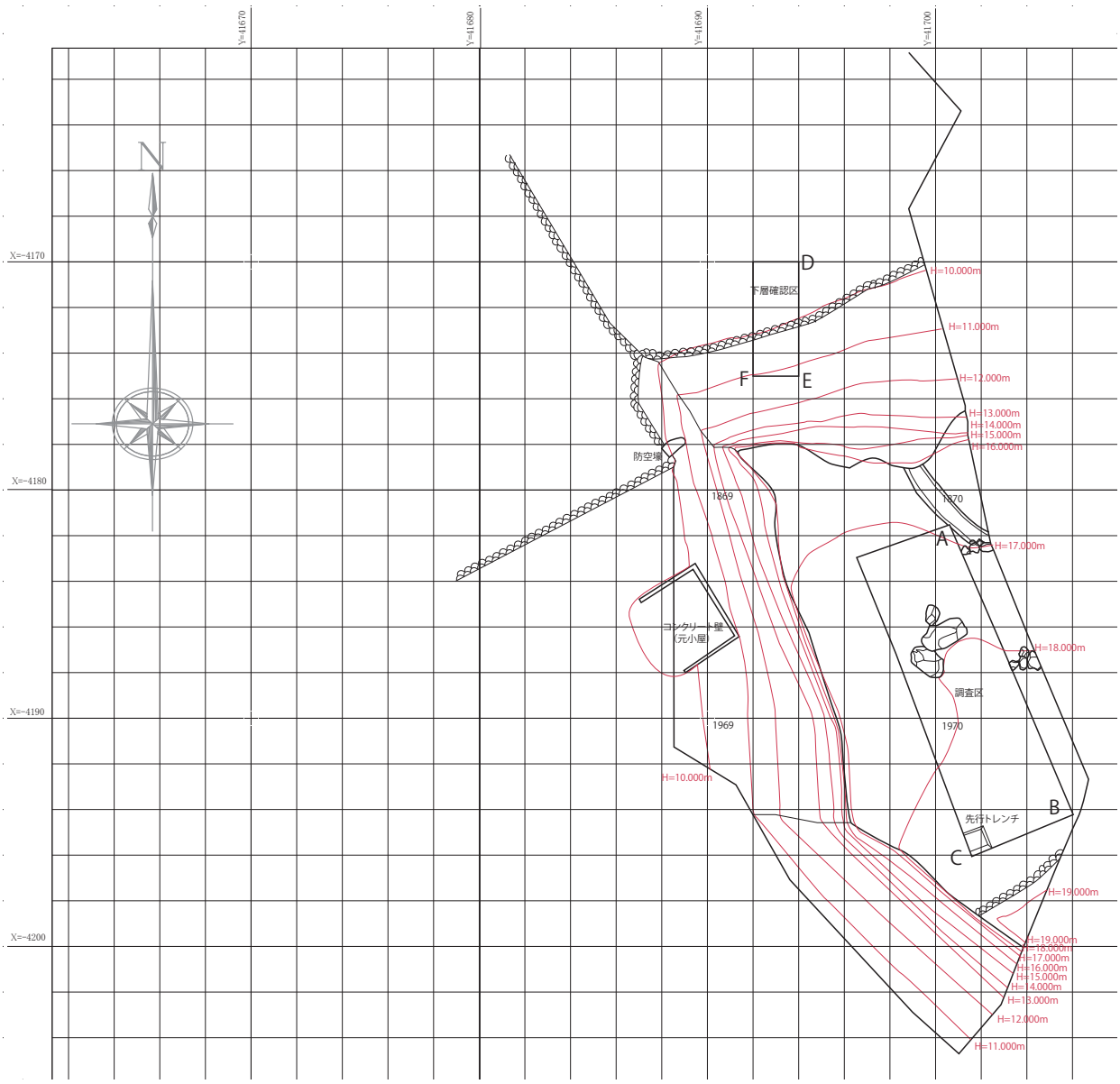
1: 第Ⅰ層	腐葉土	竹の根が多量に混じる腐葉土。
2: 第Ⅱ層	Hue7.5YR4/4 褐色土	第Ⅰ層より少ないが根が混じる。近代の遺物を含むため、近代に手が加わった土層と判断される。第Ⅲ層との境は不明瞭である。下位ほど硬化しており、第Ⅱ層の下位部分は第Ⅲ層が根の侵食を受けて土壌化したものと思われる。遺物を包含する。
3: 第Ⅲ層	Hue7.5YR5/6 明褐色粘質土	地山。直上で遺物が確認できる。

第 11 図　土層断面図（1/60）

２　調査の方法

調査対象地は新幹線路線予定地にかかる420㎡を対象とした。今富城跡の曲輪西端部分に当たる。切り通し工事によって破壊される部分を含み、試掘･範囲確認調査の対象地であった旧宅地部分は含まない。国土座標により10m×10m四方のグリッドを設定し、遺物の取り上げなどに活用した。急傾斜地を含むため昇降階段の設置や安全柵の設置など発掘調査作業の安全に配慮した。調査区の設定に関しても急傾斜地を挟んで、上部の曲輪部分に調査区を設定し、加えて空堀の所在も推定された斜面下部にも土層確認を目的として小トレンチを設定した。

重機が進入できない曲輪部分では作業員による人力掘削を行い、ラフテレーンクレーン及びバックホーにより土砂の搬出を行った。安全上の制限により掘削が困難な箇所に関しても、曲輪の様相をつかむため地形測量を行った。



A・B・C・D・E・Fは土層断面図の基準点

第 12 図　地形測量図（1/300）

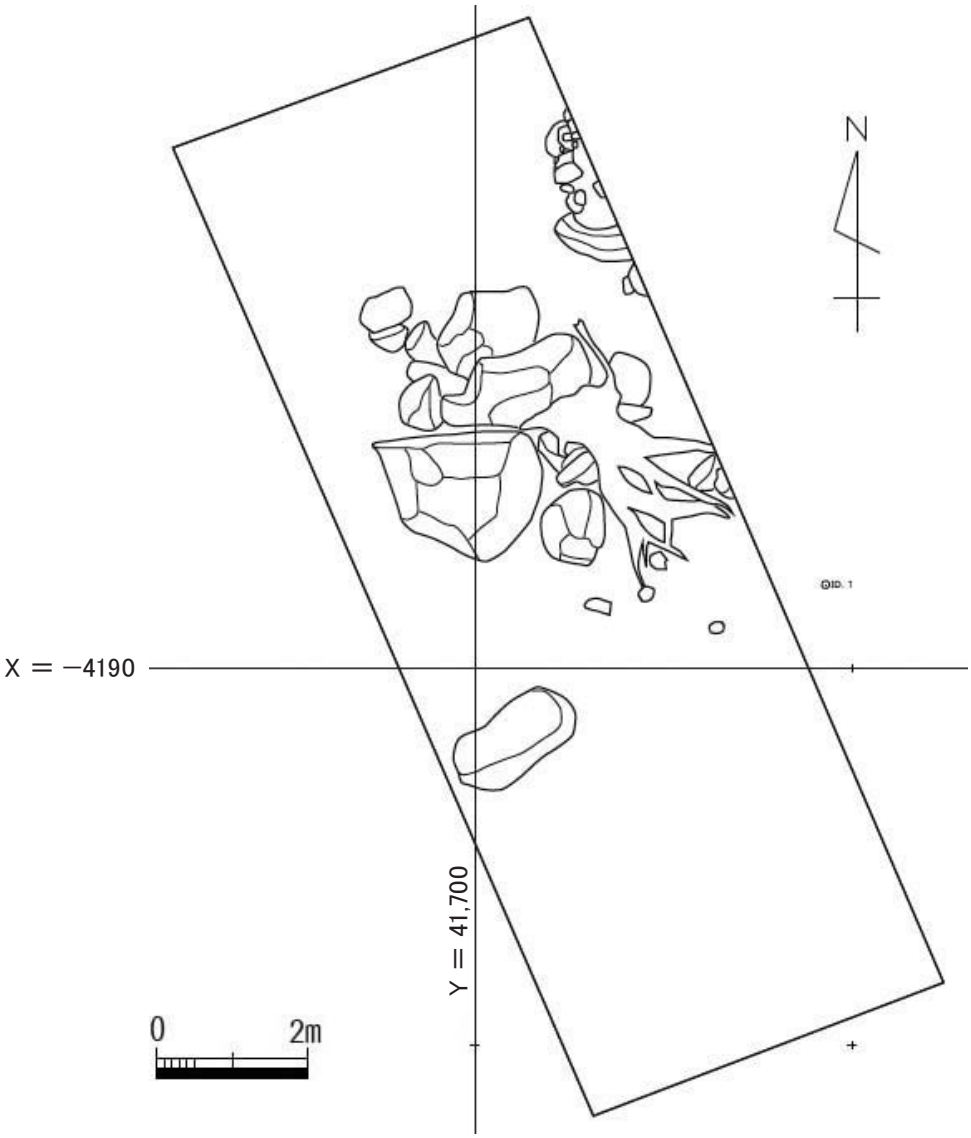
第 13 図　調査区配置図（1/2,000）

３　遺構･遺物

（１）遺構

調査区内で目立った遺構は見出されなかった。記すべきものとしては、調査区際に巨石の周囲に自然石ないし石組み状遺構が見出された。土層の堆積状況などを勘案するに、人工物として改変が加えられたとしても近世以降のものと思われる。

写真６　調査区完掘状況（北西から）



第 14 図　調査区平面図（S ＝ 1/100）

（２）遺物

今富城の本調査では、調査区内から近現代遺物を含め、コンテナ２個分の遺物が出土した。石器は縄文時代の黒曜石剥片の小片２点以外は出土が見られなかった。土器･陶磁器の中で、図化しえた遺物13点を掲載した。

1は中世後期の土師質土器の小皿の底部である。底径は4.0cmに復元される。底部は糸切りで、底部直上を強くナデつけることで高台状に仕立てている。三城城跡でも類品が出土しており、使用年代は15世紀終わりから16世紀と位置づけられる。2は内外面にカキ目を施した瓦質土器のこね鉢の破片である。口縁部と解したが、脚部片の可能性を残す。外面に炭化物の沈着を残し、内面のカキ目は右下がりである。在地産の特徴である角閃石を含まず、畿内系の移入品の可能性がある。3は大宰府編年C期（十二世紀前半前後）の標識遺物である玉縁口縁の白磁椀Ⅳ類の口縁部である。玉縁直下に強いヘラケズリを施す。1～3は文献に見える今富城の活動年代に先行する。北西に隣接する寿古遺跡の遺物出土傾向（稲富裕和･橋本幸男･松下孝幸他1992）に准じるが、中世前期の今富城跡の利用形態は未だ不明である。

4は15世紀の龍泉窯系青磁椀の胴部片である（上田1982）。胎土はやや粗であり、暗オリーブ色の釉薬は薄いものの貫入を伴う。蓮弁文のB類ではないが、雷文帯の有無や口縁部の形態はつかめない。5～7は明染付の青花皿である。5は復元底径2.6cmを測り、碁笥底で外面に蕪歯連続文、内面に芭蕉葉文を施す。小野分類の皿C群Ⅰ類（小野正敏1982）に相当する。口縁部を欠くが、小野の示した類型のように口径9.0ｃｍほどと復元される。漳州窯産と思われる。沖縄の陶磁器編年では、15世紀末から16世紀前半の吉岡Ⅴ古期･瀬戸６期に位置づけられた資料である（瀬戸2017）。染付皿C群は、大村市教委による城跡北側外郭の調査（本書Ⅲ参照）でも、見込みに大きく「寿」の崩しを記した個体が出土している。文献から知られる今富城の使用時期とほぼ重なる。6はつば付きの青花皿片で、小野分類の皿F群に属する。漳州窯産の製品は高台内に砂目が残存することを特徴とするが、6には高台部が残存していないため、色調のみから漳州窯産と認定できるかどうかは、やや不確かな面を残す。皿F群は大阪城編年の豊臣後期、16世紀後半から17世紀初頭の資料である。遺構と陶磁器の編年がほぼ確立した長崎遺跡群との対応を示せば、大村町の発掘調査（万才町遺跡）で宮﨑貴夫が設定（宮﨑1995）した長崎Ⅱ-１期、宮﨑編年を発展させた川口編年Ⅱ期（徳川公領Ⅰ期前半）に当たり、慶長６年（1601）の火災から初期伊万里が伴出するまでの時期（川口洋平2001）と捉えられている。皿F群の類品も万才町遺跡SK205、築町遺跡等から出土している。芙蓉手の製品も同時期に位置づけられる。7は青花皿の見込み部分である。内面に折枝文と「寿」らしき吉祥句を組み合わせた文様を描きだす。外面には放射状のカンナ削り痕を入れるがわずかに吉祥句の枠線を残す。小野分類の皿E群に属するが、細分類は小野の区分とは合致しない。やはり長崎遺跡群における川口編年Ⅱ期に並行する時期の遺物と看做される。8は白磁皿の底部で、底径は6.2cmほどに復元され、高台内に籾殻の沈着を残す。

9～10は近世の肥前産磁器である。9は4分の１ほど残存した口径10.4cmのくらわんか手の染付皿であり、見込みから口縁部もかけて草花文を施し、外面は無文である。10は磁器皿の口縁部で口径12.6cmほどに復元される。文様は定かではなく、貿易陶磁の可能性を残す。11～13は近世陶器である。11は面子状に加工された、いわゆる古武雄の二彩手の鉢ないし大皿の底部と考えられる。内面には淡黄色の釉薬により白化粧を施し、後に波文状の刷毛目の掻き落としを行っている。文様に注目すれば、現

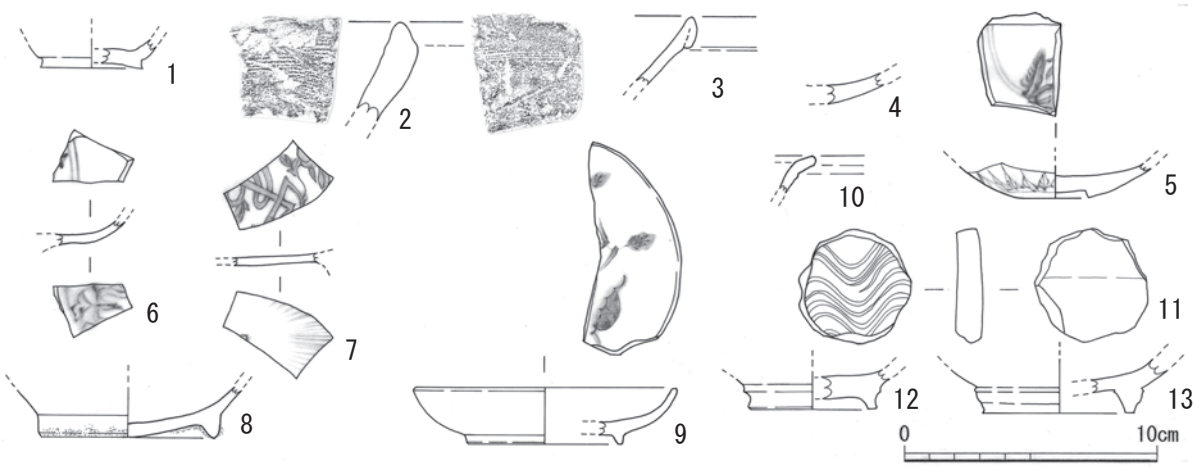
川焼の刷毛目の高級品の影響を受けたもので、1690年代から18世紀半ばごろの時期の製品と思われる。武雄市の内野山窯跡Ⅳ期（SM027大物原Ⅳ層）、甕屋窯跡B地区２号窯跡、伊万里市の西本谷上窯跡などが産地として想定される(九州近世陶磁学会編2000・東中川・家田1996)。**12**は陶器椀の高台部である。内面には暗灰黄色の施釉を施し、外面は露胎である。底径は5.0cmに復元される。**13**は内外面とも露胎で、高台の形状はやや外側が台形に膨らんだ上で接合部を削り取る。

以上のように、いずれも中世前期から近世の遺物である。今富城の稼動時期である15世紀終わりから17世紀初頭の年代の陶磁器を含むが、長崎遺跡群や、大村市内の坂口館や玖島城のように華南三彩などの希少な遺物の出土（川口洋平2014）は見られない。今富城が純忠以降の時代には一時的な支城としての利用に限られていたことを反映する出土状況である。遺物の出土層位は２・３層に分かれるが、遺物年代と層序の関係は乱れている。いずれの遺物も丘陵斜面上の二次堆積と思われるが、他遺跡からの流れ込みは考えがたい。今富城跡の小丘陵における人々の活動を物語る遺物であると考えられる。

〔参考文献〕
稲富裕和・橋本幸男・松下孝幸他 1992『寿古遺跡』大村市文化財保護協会
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会)
小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付椀・皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会)
川口洋平 2001「近世長崎の発掘調査―近年の調査成果から―」(『日本考古学』Vol.8,No11 日本考古学協会)
2014「(第７章) 大村における貿易陶磁の様相と意義」(大村市史編纂委員会 2014『新編大村市史』第２巻（中世編）大村市)
九州近世陶磁学会編 2000『肥前陶磁の編年』(九州近世陶磁学会 10 周年記念)
柴田圭子 2017「中世後期における貿易陶磁器研究の現状と課題」(『貿易陶磁器研究の現状と土器研究』第 35 回中世土器研究会資料集、2017 年 1 月 7・8 日、京都)
瀬戸哲也 2017「沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相」(『貿易陶磁器研究の現状と土器研究』第 35 回中世土器研究会資料集、2017 年 1 月 7・8 日、京都)
寺田正剛 2014「(第７章) 第３節　大村市周辺における中世城館」(大村市史編纂委員会 2014『新編大村市史』第２巻 (中世編) 大村市)
東中川忠美・家田淳一 1996『内野山北窯跡』佐賀県文化財調査報告書第 129 集（九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 20)
宮﨑貴夫 1995『万才町遺跡』(長崎県文化財調査報告書第 123 集)

第４表　遺物観察表

図版番号	器種	部位	層位	法量（cm）			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
1	土師器皿	底部	３層	—	—	4.0	ナデ	ナデ	明赤褐色		やや良	良好	
2	瓦質土器	口縁部？	２層	—	—	—	右下がり カキ目	ミガキ／ カキ目	黒褐色～黄褐色		良好	褐色粒子	角閃石を含まない
3	貿易白磁皿	口縁部	２層	—	—	—	施釉	施釉	灰白色	灰白色	良好	良好	
4	貿易青磁椀	胴部	２層	—	—	—	施釉	施釉	暗オリーブ色		やや良	やや良好	龍泉窯系、15 世紀末
5	貿易青花皿	底部	２層	9.0？	—	2.6	施釉	施釉	明青灰色		良好	良好	碁笥底　蕪歯連続文
6	貿易青花皿	胴部	２層	—	—	—	施釉	施釉	明緑灰色		やや良	良好	漳州窯か
7	貿易青花皿	胴部	２層	—	—	—	施釉	施釉	明青灰色		やや良	良好	
8	肥前磁器皿	底部	石列周辺	—	—	6.2	施釉	施釉／ 高台端部露胎	明オリーブ灰色		やや良　籾殻	やや粗	高台内に籾殻が沈着
9	肥前染付皿	1/4		10.4	2.3	5.0	施釉	施釉	灰白色	灰白色	やや良	良好	高台釉剥ぎ
10	磁器椀	口縁部	２層	12.6	—	—	施釉	施釉	灰白色	灰白色	良好	黒色・砂粒	
11	近世陶器　手鉢	胴部？	２層	—	—	—	施釉	露胎	淡黄色／褐色	褐色	良好	黒色・ 白色粒子	古武雄　面子転用
12	近世陶器椀	底部	石列周辺	—	—	5.0	施釉	露胎	暗灰黄色	暗灰黄色～ にぶい黄橙色	良好	黒色・ 白色粒子	残存部は外面全て露胎
13	近世陶器皿	底部	２層	—	—	5.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色		良好	やや粗	



第 15 図　出土遺物実測図（1/3）

写真７　出土土器・陶磁器

V　まとめ

今富城跡の今回の本調査では、建物跡や柵列など目立った遺構を見出すことが出来なかった。理由としては二つの可能性が考えられる。一つは今富城の活動年代から既に今回の調査地は通路や空き地部分として利用されていたためであるとするもので、もう一つは後世の削平が著しかったためと考えるものである。後者の推測に関しては発掘調査前の伐採状況（写真5参照）からも想定されることではあったが、その経緯についても複数の傍証がある。今富城は廃城後も近世は田畑として利用されていたことが『大村郷村記』に記されている。そして、明治３１年（1898）開業の九州鉄道長崎線建設（現JR大村線）に際しては、郡川の氾濫域の築堤盛り土のために、今回の調査地に該当すると思われる城跡の西側斜面が土砂の採取地に選ばれたとされる。また戦時中には、付録２で詳しく触れたように海軍の高角砲陣地（皆同砲台）が城の曲輪主体部に築かれ、大きな損壊を受けている。後者の理由が有力と思われる。

一方で、調査区からの出土遺物としては、文献記載から判明する今富城の活動時期と重なる16世紀後半から１７世紀初頭に位置づけられる明染付や土師器皿が見つかり、文献記載を裏付けることとなった。古代末･中世前期の貿易陶磁の白磁碗Ⅳ類や瓦質土器のこね鉢も出土した点については、北西に隣接する寿古遺跡との関係から説明すべきと考える。加えて、近世村落の生活の様相を示す唐津焼転用の面子やくらわんか手の日常磁器が出土している。明染付の青花皿F類については、廃棄年代が1640年代（Ⅲ期）まで下る様相が長崎遺跡群の遺物編年から言及されている（川口洋平2001）が、今富城の活動年代を下らせる必要はないものと考える。大阪夏の陣の平定（元和偃武）を受けて慶長20年（1615）閏6月に江戸幕府が一国一城令を出したこととも今富城の廃絶を示すものと推察され、遺物の下限時期が時期的に符合する。城跡の出土遺物の中に、古伊万里が含まれていない点も一つの傍証となるだろう。長崎遺跡群や、針尾城（川内野･久村2005）･壱岐の覩城跡（川口･松永･小松1997）･対馬の厳原市街地（本田2004）、島原半島の日野江城、大村市内の坂口館や玖島城と比較すると、今富城跡から華南三彩や東南アジア産陶器などの希少な遺物の出土は見られないこと（川口洋平2014･2009）については、今富城が純忠以降の時代には一時的な支城としての利用に限られていた事実を反映するか、あるいは三城城跡のように、伝世品として玖島城に最終的に運ばれた可能性があると解される。

出土遺物の総量、及び報告できた遺物は必要十分なものであり、城北側の搦め手側の空堀付近を発掘した過去の大村市教育委員会の調査成果に加え、出土遺物の様相の面から補強材料を与えるものとなった。既に破壊が著しいとの予見もあった曲輪の西端部分の調査から、使用年代を20年単位で絞ることの出来る遺物が複数得られたことは、有意な成果であったと考える。遺構には恵まれなかったが、遺物の面から今富城の活動年代に迫ることが出来た調査であった。

中世後期の今富城の曲輪の中核部分は、第二次大戦中の海軍の高角砲陣地「皆同砲台」の建設工事で破壊を受け、今もコンクリート構造物が残る。近隣の遺跡では、５世紀の黄金山古墳もやはり付近における海軍の今富砲台の建設により損壊を受けたが、より強力な12cm聯装高角砲を有した今富砲台は、戦後にGHQ統治下で徹底的に破壊された。これらの近現代の戦跡遺跡は「軍都」大村の歴史と戦争の教訓を今に遺す遺産であると共に、戦国時代と近代に通じる戦術上の要地としての城跡の小丘陵

の意義を物語っている。

時代の重層する遺跡の保護と活用のあり方を考える時、現東彼杵郡波佐見町の出身で旧制大村中学（現大村高校）に学んだ歴史学者の黒板勝美のことが想起される。黒板は官学アカデミズム史学の体現者として日本の古文書学を大成し、『大日本古文書』や『新訂増補国史大系』、『朝鮮史』等の史料編纂で知られる一方、植民地統治下の朝鮮半島の文化財調査に深く関与し、藤原京大極殿跡や古代寺院跡・古墳の発掘調査を主宰するなど考古学上の業績を遺し、現代の日本及び韓国の文化財保護行政の体制の構築者でもあった。黒板の史跡・文化財保護の考え方は、全ての文化財に序列価値付けを行わず、地域別に台帳化して平等に保護に当たることをよしとするもの（黒板勝美1940・田中琢1982）で、近世以来の史跡・建築物等の現状を歴史の重層を現すものとして徹底的に保全することを主眼とし、建物復元を含め創建時ないし最盛期の姿に戻す現在一般的な史跡整備のあり方とは反していた。黒板のこの考え方は同時代のイギリスの学者の文化財観を参照したもの（田中1982）と見るよりは、明治末年の第１回洋行で欧州の史蹟・博物館・文書館を悉皆調査した際の自身の知見によるものと考えられるが、中世後期と昭和戦中の遺構が重層する今富城跡の保護のあるべき姿を考える時、中世城郭と近代戦跡を共に価値あるものとして保全し、未来に残す考え方は意義あるものと思う。

【参考文献】

川口洋平 2001「近世長崎の発掘調査―近年の調査成果から―」（『日本考古学』Vol.8,No11 日本考古学協会）
川口洋平 2009「長崎の成立過程―開港前後の考古学的様相―」（考古学と中世史研究会 2009『中世はどう変わったか』第７回考古学と中世史シンポジウム資料集）
2014「（第７章）大村における貿易陶磁の様相と意義」（大村市史編纂委員会 2014『新編大村市史』第２巻（中世編）大村市）
川口洋平・松永泰彦・小松旭 1997『覩城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第３集・長崎県教育委員会
川内野篤・久村貞男他 2005『針尾城跡』平成 16 年度佐世保市埋蔵文化財調査報告書・佐世保市教育委員会
黒板勝美 1912「史蹟遺物保存に関する意見書」『史学雑誌』23-5（黒板勝美 1940『虚心文集』第４、吉川弘文館所収）
田中琢　1982「遺跡遺物の保護原則の確立過程」（小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会編『考古学論考』平凡社）
本田秀樹 2004『今屋敷家老屋敷跡』長崎県文化財調査報告書第 178 集

写真８　調査区遠景（北から）

付編　今富城の近現代戦跡について

第 16 図　大村扇状地内軍事施設配置図（浦田・堀内・東郷 2017 より）（1/30,000）

（※）本章の引用公文書の中で翻刻を行った部分について、漢字の字体は常用漢字体に改めた

第 17 図　佐世保鎮守府陸上防衛部隊配置図

今富城は中世城郭遺跡であるが、その曲輪の主体部には太平洋戦争中に高射砲陣地として改変が加えられている。いわゆる皆同砲台である。現地には今も砲座ないし探照灯台座、または上部を頑丈な鉄筋コンクリートで保護した弾薬庫と思われるコンクリート構造物が残る。３m四方に近いコンクリ

写真９　四十口径三年式八糎高角砲（靖国神社遊就館展示資料）
出典：Wikimedia Commons

ート構造物自体は弾薬の一時的な収納庫と考えられる。砲座とする文献もあるが、この規模の高射砲は大型トラックでも移動可能な規模のものであり、それにふさわしい小規模な台座は、現在は地中に埋もれているか、戦後に破壊されたと思われる。

後に〔史料２〕に見るように、皆同砲台には、8cm高射砲４基が扇状の配置で設置されていた。海軍の制式で言えば、四十口径三年式八糎高角砲（写真９）である。大正時代のやや旧式な兵器で、太平洋戦争中には主要艦船の装備からは外されつつあったが、小艦艇や対空砲としては重用されており、生産が継続されていた。

高射砲は、戦時に敵軍の爆撃機を撃墜するために陸上や大型艦船に設置される対空兵器である。破壊力や射程距離は要塞の砲台や戦艦の主砲に劣るが、毎分14回程度の発射速度の速さや仰角など対航空機に特化した性能を持つ。日本海軍は高角砲と呼ぶこともあった。高射砲単独の設置では、飛行中の敵機の正確な砲撃は不可能であり、強力な照明で敵機を照らし出す探照灯〔＝サーチライト〕[1](写真10)・聴音機[2]、三角測量の原理で対象物までの距離を測定する測距儀、(電波探信儀＝レーダー)[3] などと組で運用される。

写真 10　九六式百十糎探照灯
出典：渡部義之編 1998 より

今富城跡の高射砲は史料上、「皆同砲台」に相当し、「軍都」と化した大村を防衛するため、1943～1945年にかけて建設されたものとされる。また福重町の黄金山古墳付近には福重砲台、上諏訪町には諏訪砲台(第17図参照)、大村湾内の箕島に箕島砲台が建設された[4]。小丘陵を利用した古墳や中近世城郭跡に重なって建設される様子には、時代の違いを超えた地勢上の優位性を窺うことが出来る。大村市内はその軍事拠点的性格を反映して、米軍による空襲の被害も大きく、1944年（昭和19)10月25日にはアメリカ陸軍航空軍機100機（B-29戦略爆撃機56機を含む）が中国成都の基地から初めて大規模な空襲を行い、軍関係の被害には詳細が不明

写真 11　今富城跡高射砲陣地遺構
出典：長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課編 2011

な点が多いが、1,150戸の家屋が焼失する被害をもたらした（大村市史編纂委員会2016）。航空廠の被害は大きく、鬼橋地区に奄体壕を築くも、翌年にかけて度重なる空襲を受けることとなった。新幹線建設に伴う2013年の平野遺跡の本調査では13片もの20ポンド爆弾の不発弾破片や爆発による撹乱孔などが発見され（浦田・堀内・東郷2017）、2016年度の立小路遺跡の調査でも不発弾が発見されている。竹松遺跡の調査でもJR大村線沿いに爆弾が炸裂した跡と見られる大土坑が出土した。大村市内を狙った戦略爆撃の激しさを伝えている。

一般に、旧日本陸軍より海軍の方が終戦時の公文書、記録類の焼却処分の程度が著しく、戦時下の海軍の活動には不明の点が多いと言われる。防衛庁防衛研修所（現防衛省防衛研究所戦史部）が編纂した太平洋戦争に関わる日本政府の公式戦史である戦史叢書（1966～80年刊行）でも、海軍側の本土防衛体制については参照史料と紙幅の制約、更には華やかな作戦本位で後方・軍備・国民生活の影響の軽視の編集姿勢（藤原彰1977）のためか、記述は十分とは言えない状況[5]である。しかし、近年の戦史資料の情報公開により、今富城跡に作られた皆同砲台の建設の経緯と終戦時の状況を窺うことが出来るようになった。先ず、建設の経緯は「佐世保海軍警備隊戦時日誌」（防衛研究所所蔵史料・アジア歴史資料センター公開）にうかがうことが出来る。戦時中の公文書は終戦時に全国的に一斉に焼却処分が行われ、多くが現存していないが、本資料は恐らくは米軍駐留時に接収され、昭和33年（1958）までワシントン郊外フランコニア等の記録保管所に保管され、日本方に返還された資料である[6]。爆撃機迎撃用の航空部隊の運用に焦点が当たった戦史叢書の当該巻（防衛研修所戦史室1968）の記述には十分に参照されていないと思われる。皆同砲台に関する記述は、以下に初めて昭和１８年３月の部分に現れる。

〔史料１－１〕佐世保海軍警備隊戦時日誌[7]

（五）海軍艦機密第九八八号訓令及佐鎮命令第八三号ニ依ル長崎砲台ヲ皆同ニ移転工事中

防衛体制の詳細が書かれているため、旧海軍の文書扱いで最上位の「軍機」の扱いを受けていた公文書である。毎月の日誌冊子冒頭には表紙（「軍機」の押印以外は和文タイプ印刷）に続き、その月の部隊の活動の概要を軍令・軍政に分けて（任務戦闘及配備・戦備及政策事項）、それらの根拠となる公文書番号を併記の上で和文タイプ印刷によって印字されている。組織図（手書き）、「佐世保鎮守府陸上防衛部隊配置図」に続いて、手書きの人員表、准士官（兵曹長）以上の職務分掌を記した名簿が付された上で、毎日の管内の報告内容（作戦経過概要）が手書きで書かれる。報告内容については担当部署と連絡手段も併記される。長崎砲台の設備および人員を大村に移動させた意図については、同じく稲佐山に置かれて本土防空作戦に当たった陸軍の高射砲陣地と海軍との役割分担があったとされる（大村市史編纂委員会2016）。次ぐ４月分（Ref.C08030478700）には以下の記述がある。

〔史料１－２〕佐世保海軍警備隊戦時日誌　昭和18年４月条

（五）官房機密第九八八号訓令及佐鎮命令第八三号ニ依ル長崎砲台ヲ皆同に移転工事完了

５月分の戦時日誌の段階では既に皆同砲台は稼動しており、担当官として兵曹長２名の氏名が挙げられている。長崎砲台時代からの先任兵曹長（皆同高射砲台射撃指揮官兼第二分隊士）に加えて兵曹長１名（皆同高射砲台照射指揮官兼第二分隊士）が増員され、防空体制が強化される状況を窺うことが出来る。月ごとの日誌の構成は３月とほぼ同じである。その後、大村地区で海軍の高射砲台は箕島、諏訪にも設置された。逐次、地区別の高角砲陣地の訓練の実施も記される。

昭和19年の「作戦経過概要」（Ref,C08030480300）には７月１日の項目に佐世保鎮守府管内での、田島岳（但馬岳）からの八糎高角砲2門の移設が記される。日誌の体裁を見れば、月の活動の概要を記した和文タイプ部分はなくなっている。戦時体制が更に強化され、事務の簡略化が進んだようである。移設により、高角砲の総数は４門となる。第二次大戦中のドイツ本土では、連合国軍の爆撃に備えた防空用の高射砲は４門組で運用することを原則としていた（渡部義之編2002）ことを想起すれば、４門セットでの運用も意味あるものだったと考えられる。なお、田島岳は佐世保市街地の北側に位置し、佐世保鎮守府管内の海軍の防空体制を統括する高射指揮所を備え、佐世保市内筆頭の高射砲台[8]であった。7月27日には移設工事が完了した。

〔史料１－３〕

一　田島岳八糎高角砲皆同砲台ニ移設作業開始

（中略　7月27日記）

一　皆同砲台ニハ田島岳より八糎二門移設完了

以降の時期の戦時日誌には、砲台の設備の変更などの記載は見えない。翌昭和20年3月からは黄金山古墳付近に福重砲台が追加で建設され、大村平野の対空防衛体制は強化される。

また、終戦後に連合軍に軍事設備を引き渡した際の佐世保海軍警備隊管内の資料[9]からも戦時中の高射砲陣地の様相を窺うことが出来る。「皆同砲台」に関わる部分[10]を以下に翻刻する。終戦時の状況を示すものであるため、長崎砲台から移設した２門と田島岳から移設した２門の建設順序、位置関係については不明である。

〔史料２〕引渡目録　佐世保海軍警備隊　長崎県の部（４）

・漢字は元は縦書きで、英字は筆記体で表記されている

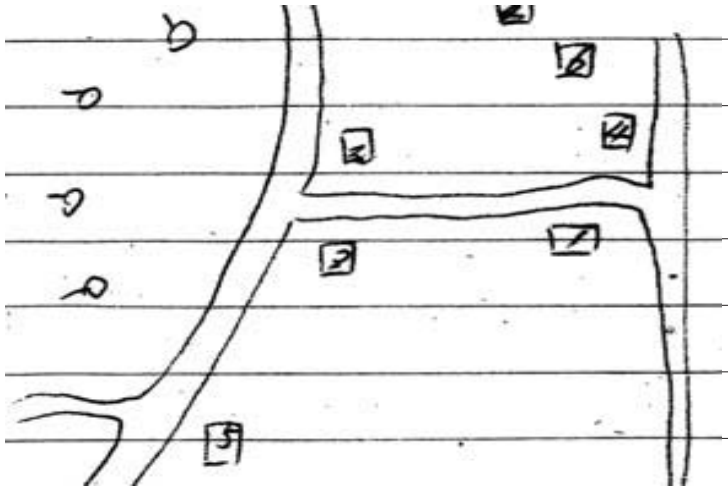
・旧字体は常用漢字体に直し、英字の大文字小文字の区分は残した

Kaido Battery　（福岡納）

目録 Unit					皆同砲台	
品名	数称	数量	Name of Arms	Number	所　在	記事
八糎高角砲	基	四	8cm single anti-aircraft gun	4	長崎県皆同郷 大村市福重村	附属品共 With belongings
百十糎探照灯	〃	一	search light	1	Nagasaki Prefecture	〃
測距儀	〃	一	range finder	1	Omura city Hukushige	〃
八糎弾薬包	個	六三四	8cm guns shell	634	〃　Kaidogo	
八糎望遠鏡	〃	一	8cm　grass	1	〃	
電話器	〃	一二	telephone	12	〃	
鉄兜	〃	二十	Helmet	20	〃	With belongings
発電機	基	一	dynamo	1	〃	附属品共
防毒面	個	五五	gas mask	55	〃	
（終）						

海　　軍

皆同砲台		Kaido battery			
兵舎	barrack	木造平屋	wooden house	180㎡	皆同
指揮所	commanding place	〃	〃	40㎡	〃 omura city Kaido
弾庫	magazine	堀開耐弾	ground magazine	40㎡	〃
附属家屋	belonging house	木造平屋	wooden〔ママ〕	36㎡	〃



1兵舎 barrack
2 指揮所 commanding place
3 烹炊所 cooking room
4 弾庫 magazine
5 待機所 resting room
6 要具庫 warehouse

大村空襲にも使用された米軍のB-29戦略爆撃機[11]は対日本への絨毯爆撃に特化して投入された。1944年から大々的に量産され、最終的に3970機が生産された。

中国成都や1944年夏に占領したサイパン・テニアン島を基地とした本土空襲について、1980年代以前の航空・軍事関係の書籍類では、１万ｍもの高度に対して高射砲は為す術がなく、海軍の雷電などの戦闘機による迎撃以外に太刀打ちする手段がなかったように書くものが多かった。が、近年では高射砲による攻撃も有効性が高く、対日本本土への空襲におけるB-29の損耗率は従来型の爆撃機（B-17・B-24）と大差なかったとの指摘も行われている。三式十二糎高射砲はB-29を10機以上撃墜したとの記録もある（小倉磐男1994）。総力戦体制による操縦士の練度低下と整備水準の低下、航空燃料の質低下によって、日本側の戦闘機による迎撃は困難であり、むしろ高射砲による撃墜成果を航空機による撃墜とすりかえて発表された事例もあったと言われる。

また、ターボプロップ機を含むジェットエンジンの場合と異なり、B29などレシプロエンジンの飛行機は高度上昇に伴う出力低下が顕著であった。出力の減少は速度低下を招き、高射砲による撃墜の可能性を上げる。高高度でも出力を維持するために過給機（排気タービン２基）を搭載したが、その効果には限界があった。戦略爆撃のために大量の爆弾を搭載する場合には低空飛行が有用であり、第21爆撃集団[12]司令官カーチス・ルメイ少将（当時・後に空軍参謀総長・大将）は日本近海の制空権の確保を利して3000ｍ以下の爆撃飛行を発案し、東京大空襲等の本土空襲で甚大な空襲被害を与えた。しかし高射砲が付近に設置されていた場合、低空飛行は撃墜のリスクを高める。大村市内の防衛に関して皆同砲台が無力であったとは考えがたい。

写真など戦中の記録は皆無だが、建設経緯および終戦時の姿が史料上明らかである高射砲陣地「皆

同砲台」が持つ歴史的な価値は少なからぬものがある。長崎県内の戦跡遺構としては、日本海軍が1920年代に対馬に豊砲台、壱岐に黒崎砲台が建設し、１トンの砲弾を35km先に発射可能な性能を持つ世界最大級の40cm砲を据え付けていた。同規模の釜山の張子嶝砲台と併せて対馬海峡の守りの体制を整えていたが、実戦に使用されることは遂になかった。米軍の本土空襲に対抗して軍都大村を守った皆同砲台の果たした役割は、豊砲台や黒崎砲台と比較しても小さからぬものがあったと考えられる。

〔参考文献〕
浦田・堀内・東郷 2017『平野遺跡』（新幹線文化財調査事務所調査報告書第２集
大村市史編纂委員会編 2016『新編大村市史』第４巻（近代編）大村市
小倉磐男 1994『カメラと戦争』朝日新聞社
桑原茂樹・松谷安明・一来俊男・小澤正利 1975『本土方面海軍作戦』（防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』第 85 巻）朝雲新聞社
第二十一海軍航空廠殉職者慰霊塔奉賛会 1999『放虎原は語る』大村市
高野庄平・末國正雄 1975『海軍軍戦備〈２〉開戦以後』（防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』第 88 巻）朝雲新聞社
多比良長好 1972『本土決戦準備〈２〉九州の防衛』（防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』第 57 巻）朝雲新聞社
長崎県福祉保健部原爆被爆者援護課編 2011『長崎県の戦争遺跡と戦没者慰霊碑』
富士電機製造株式会社社史編纂委員会 1957『富士電機社史　1923 ～ 1956』〔１〕
藤原彰 1977「防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』」（『歴史学研究』451 号・青木書店）
宮辻秀雄・栗田正忠 1968『戦史叢書　本土防空戦』（防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書』第 19 巻）朝雲新聞社
柳澤潤 2008「日本陸軍の本土防衛に対する考え方とその防空作戦の結末」（『戦史研究年報』11・防衛省防衛研究所）
渡部義之編 1998「96 式 110 センチ探照灯１型」『特型駆逐艦』（「歴史群像」太平洋戦史シリーズ Vol.18・学習研究社）
2002『ドイツ本土防空戦』（「歴史群像」欧州戦史シリーズ Vol.19・学習研究社）
高射砲陣地と防空砲台（Anti Aircraft Battery）http://www17.big.or.jp/~father/aab/aab.html（2017 年６月 22 日閲覧）

---

1 海軍の 110 糎探照灯には九二式と九六式があるが、九二式は俯仰手と旋廻手の二人が操作する複雑なもので、兵員が限られた陸上の防空砲台に設置するのがふさわしいとは考えがたい。九六式は同期駆動方式とウォード・レオナード式の他励制御（半導体を利用したサイリスタ制御が登場する以前の界磁位相制御の一種）を採用し、微速でも円滑な動きを実現し、的確に照射する方向を向けることが可能となった（富士電機製造株式会社社史編纂委員会 1957）。同書によれば、更に大型の九六式 150cm 探照灯も国内防空用に数百基生産されており、110cm 探照灯は殊更に稀少な器具ではない。

2 レーダーの普及以前に、複数人が敵機の接近方位を探る大掛かりな聴音機が防空用に配備されていたが、海軍佐世保鎮守府管内ではレーダーが配備された佐世保市内２砲台に次ぐ６ヶ所にしか聴音機は配備されていない。

3 第二次大戦中、米英に対しレーダーの開発（予算投入）・量産が遅れた日本では、海軍高射砲陣地への配置は呉・佐世保の鎮守府付近など少数に留まった。離島や岬など多くの地点に見張り所を設置して、不足を補ったと見られる

4 「引渡目録　佐世保海軍警備隊　長崎県の部（４）」（後述）の記載によれば、福重砲台に関しては、「十 cm 聯装高角砲」と書かれていることから、設置されていたのは海軍の制式で九八式十糎高角砲であると考えられる。1938 年(皇紀 2598 年)に制式化され、駆逐艦「秋月」に搭載されたことで知られる優秀兵器である。箕島砲台にはさらに強力な 12.7cm 連装高角砲が設置されたが、1970 年代前半の長崎空港建設時に削平されたと思われ、跡形もない。

5 兵站部門については、戦史叙述上の関心の不足はより深刻である。本書に関わる事項では、海軍の軍備を記した巻（高野庄平・末國正雄 1975）でも、１万人以上の人員と 210ha もの敷地を有して大村の近現代史に甚大な影響を齎した第 21 海軍航空廠の設置・拡充について１行も記載がない。佐世保海軍工廠の支所として発足した経緯から記載漏れが起こったかと思われる。魚雷を生産した川棚海軍工廠については、より小規模にも拘わらず、新設工廠のため詳しい記述がある事と均衡を欠いている。

6 佐世保海軍警備隊戦時日誌の表紙に付された、「昭和 33 年５月調製」の防衛研修所戦史室長西浦進の名義の解題による(Ref.C08030478200)

7 昭和 18 年３月条（Ref.C08030470800、昭和 17 年 12 月１日～５月 31 日佐世保海軍警備隊戦時日誌（４）、佐警隊機密第十四号ノ八)。原本は縦書。

8 十糎聯装高角砲３門、40mm 聯装機銃２門、同単装機銃１門、機銃 33 丁、S ３電探（四号一型電波探信儀＝レーダー）１基、110cm 探照灯を備えていた。

9 原本は防衛省防衛研究所所蔵であり、請求記号は「①中央－引渡目録 -190」である。国立公文書館アジア歴史資料センターが C08011163500 とのレファレンスコードを付してインターネット公開している。

10 (1094 ～ 1096 のノンブルを付す)

11 史上最大規模の出力のレシプロエンジン R3350 サイクロンエンジン（離昇時 2200PS）を４発搭載し、爆弾搭載時（7,250kg）で 6,600km に上る航続距離と与圧された機内設備を利して１万m以上の高高度を飛行可能な画期的な性能を有していた。当初はオーバーヒートやマグネシウムの発火などの問題があり、エンジンの出力にも不安定な面があったが、キャブレーターから燃料噴射方式に変更したことで改善された。

12 アメリカ空軍（1947 年創立）の前身であるアメリカ陸軍航空軍 United States Army Air Forces の旗下の爆撃軍で、1944 年８月に編成された。B29 による日本本土爆撃に特化し、司令部はサイパン、後にグアムに置かれた。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いまとみじょうあと
書　　名	今富城跡
副 書 名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅸ
シリーズ名	新幹線文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第9集
編 著 者 名	堀内和宏
編 集 機 関	長崎県教育委員会
所　在　地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町2番13号　TEL095-824-1111
発 行 年 月	西暦2017年10月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
今富城跡（いまとみじょうあと）	長崎県（ながさきけん）大村市皆（おおむらしかい）同町（どうまち）485番地5他（ばんち ほか）	42205		32° 57′ 42″	129° 56′ 45″	20161018～20161121	420	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）路線部建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今富城跡	城館	・中世 ・近世 ・近代	・石組	・土師器 ・瓦質土器 ・肥前陶器 ・青磁　白磁 明青花 ・肥前磁器	

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第９集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

今　富　城　跡

平成 29（2017）年 10 月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒 850-8570　長崎市江戸町２番 13 号
TEL ０９５－８２４－１１１１

印刷所　オムロプリント株式会社
長崎県大村市原町８４-３
TEL ０９５７-５４-７０００